

60355

教科書文庫

6
810
37-1949
01304 49880

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

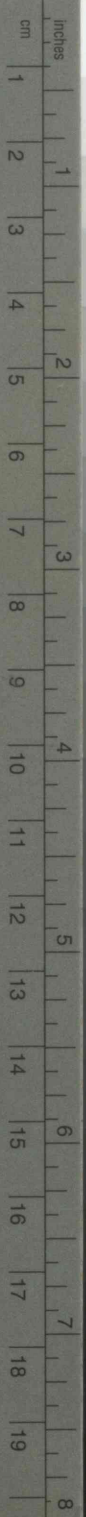


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省検定済教科書



教育部
資料室

柳田国男編

あたらしいこくご二ねん 下



KC
To 72



中央図書館



昭和二十四年十月十日
小学校国語科用

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449880

広島大学図書
0130449880

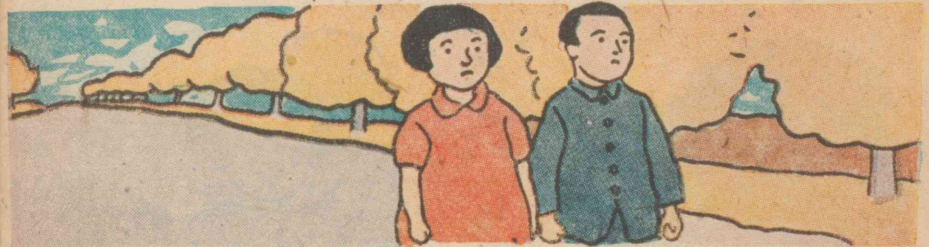
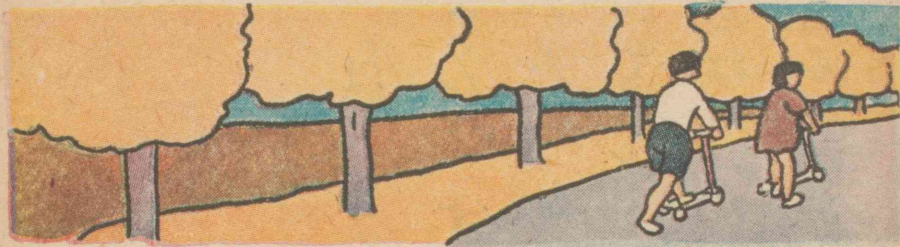


あたらしい
こくご
二ねん

広島大学
教育学部図書

東京書籍株式会社

広島大学図書
0130449880



もくろく

一 さかなどり……………四

二 でんしゃと きしゃ……………十四

 (一) てんしゃ

 (二) きしゃに のって

三 きれいに しましよ……………三十四

四 ことばあつめ……………四十四

 (一) なかよしの ことば

 (二) はんたいの ことば

五 しょうぼう……………四十八

 (一) かじ

 (二) しょうぼうしよ

六 はしらどけい……………五十五

七 ゆき……………六十六

 (一) ゆきが ふる

 (二) ゆきの あさ

 (三) ゆきあそび

八 ゆうびん……………七十八

 (一) 小づつみ

 (二) ポストから 手がみの とどくまで

九 どうわ……………八十七

 (一) 町の ひ

 (二) 春の 空へ

五十 おん……………百十

 べんきようの 手びき……………百十二

 あたらしく 出た おもな ことば……………百二十二

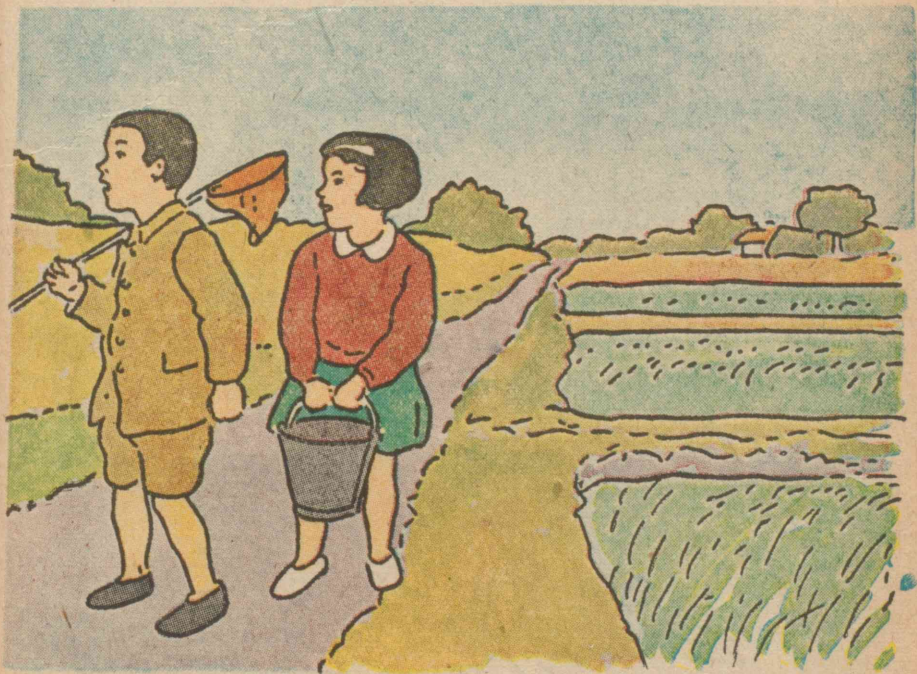
 あたらしく 出た かんじ……………百二十七



一 さかなどり

(一)

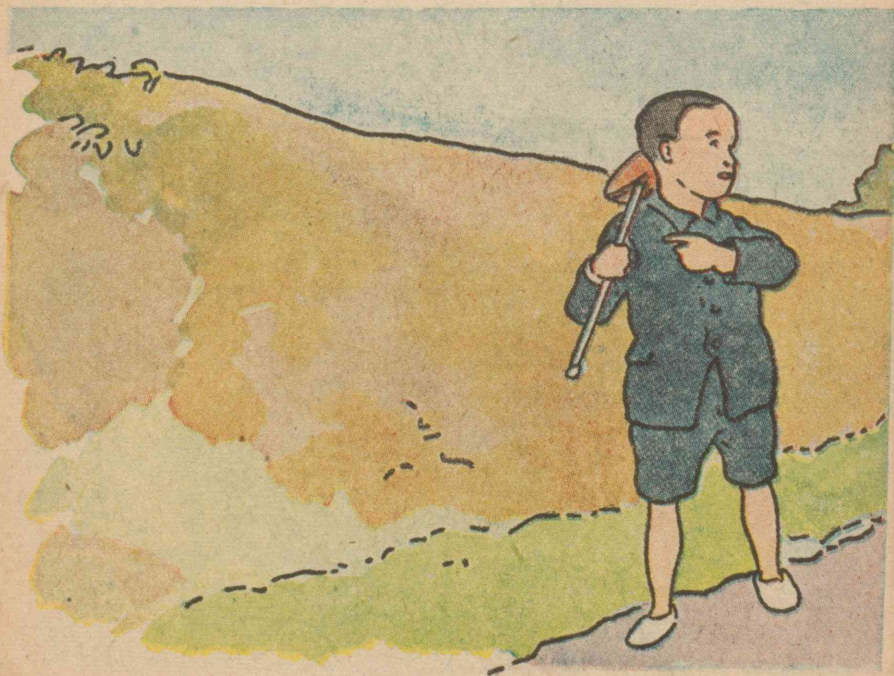
はるおさんと ただし
さんは すくいあみを
かたに かついで ある
いて います。よし子さ
んは バケツを もって
あるいて います。



三人は どこへ 行く
のでしょうか。

たんぼの むこうは、
すこし 高い どてに
なつて います。

「走つて のぼろう」
と、はるおさんが 大き
な 声で いいました。
「走つて のぼろう」
ただしさんも いいま



した。

三人は どての上 走って のぼりました。小川
が キラキラと 光って います。

「まあ、きれいな 水。」

よし子さんが いました。

三人は ながれの そばに
おりました。

「どこで とろう。」

「日かげに なって いる

ところが いいよ。」

「あさい ところに しまし
ようね。」

三人は めいめい そう

いきました。

あさくて 日かげに なつ

て いる ところを 三人は

さがしました。

「あそこが いいよ。」

ただしさんが ゆびさしま



した。

「どこ。」

はるおさんと よし子さんは、ただしさんの ゆびさす方を みました。

「あそこに きめよう。」

と、はるおさんが 元気 よく いました。三人は じゃぶじゃぶと 小川に はいって 行きました。

(二)

サラサラ、サラサラ。

小川の 水は 大きな 石に ぶつかって、二つに わかれて ながれて います。

キラキラ、キラキラ。

たいようの 光を あびて

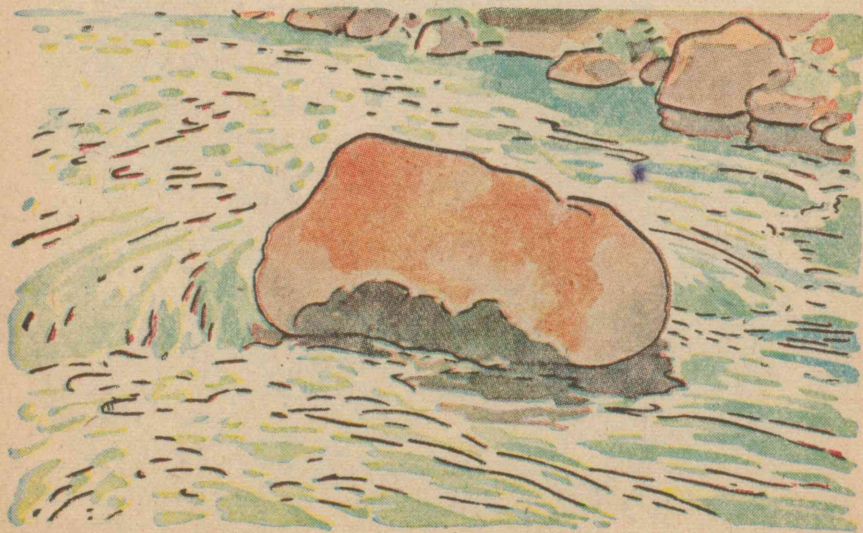
ながれは かがやいて います。

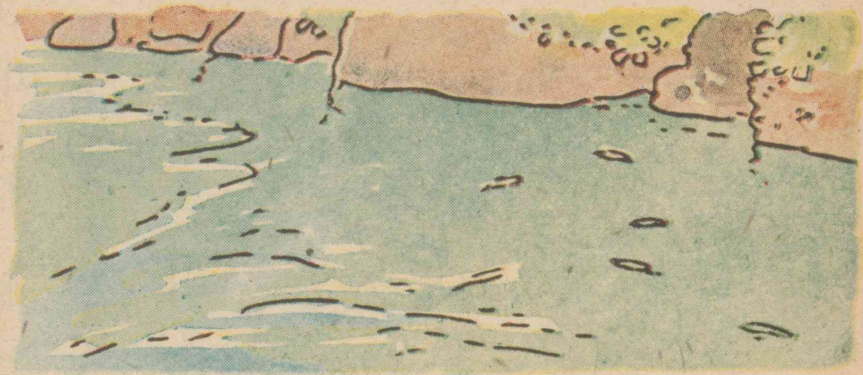
サラサラ、キラキラ。

キラキラ、サラサラ。

きしの くさむらが 水の

上に かげを うつつて います。

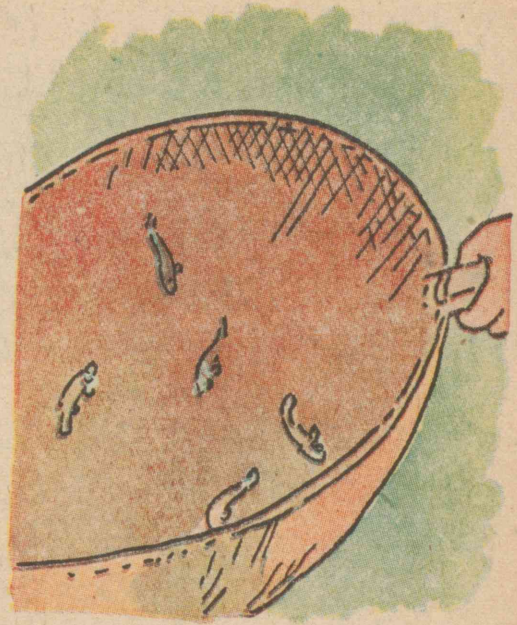




す。
石のそばまで 三人は しずかに
水の中を あるいて 行きました。
石の かげに、めだかが たくさん
あつまつて いました。川ぞこの 小
さな 石や すなが、すきとおつて
よく みえます。しばらくの あいだ、
三人は めだかの およいで いるの
を ながめて いました。

三人は かおを みあわせて にっこりしました。
「そつと 入れないと にげるよ。」
と、はるおさんが 小さな
声で いました。
はるおさんと ただしさ
んが、すくいあみを 石の
りょうがわから そつと
入れました。めだかが お
よいで いる 下の方か
ら、しずかに しずかに





すくいあげました。

「あつ、とれた、とれた。」

ふたりは 大きな 声を
出しました。

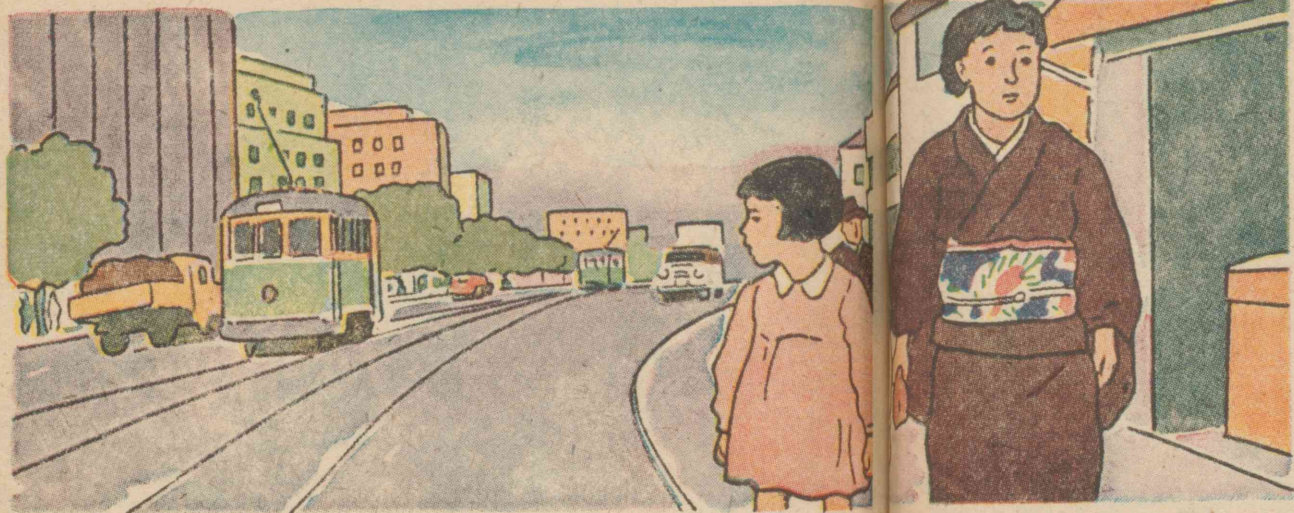
た。はねる たびに キラツ
キラツと 光ります。
よし子さんは バケツに 小川の 水を すこし 入
れました。はるおさんと ただしさんは、あみの 中で
はねて いる めだかを バケツに 入れました。

めでか は すくいあみの
中で ピチピチ はねまし

こんどは むこうぎしの
くさかげに 行きました。
よし子さんも はるおさん
の あみを かりて すく
いました。

よし子さんは ながれて
来た 木のはを あみで
すくって バケツの 中へ
入れました。





二 でんしゃと きしや

(一) でんしゃ

すみえさんは おかあさんと ひゃつかてんへ かい
ものに 行きました。

すみえさんの うちには、でん
しゃどおりから ほそい みち
を はいった 所に あります。

すみえさんは 元気 よく
おとうさんに あいさつを し
て 家を 出ました。

でんしゃどおりは しゃどう
と ほどくに わかれて いま
す。ほどうは すこし 高く
なって いて 大ぜいの 人が
あるいて います。しゃどうに
は でんしゃ、バス、トラック、
じてんしゃなどが、いきおい

よく 走って います。四つかどまで 来ると、おかあ
さんと すみえさんは 立ちどまりました。みちの む
こうがわの しんごうどうを 見る ためです。

しんごうどうは 赤でした。

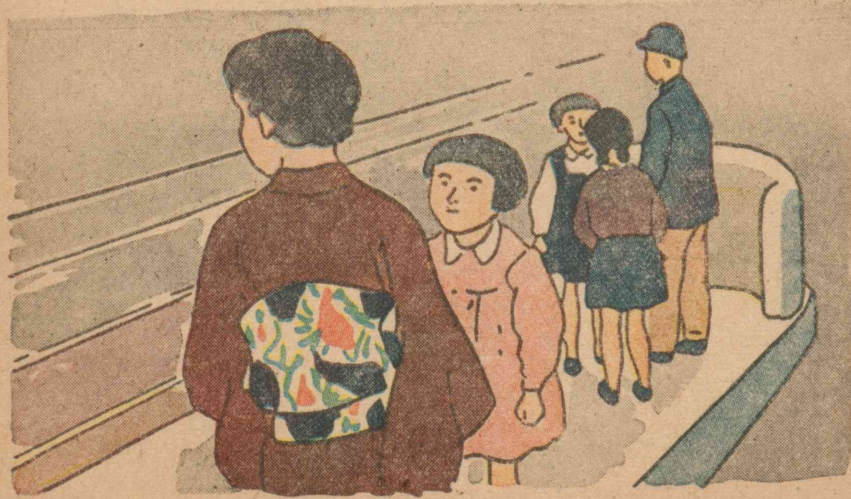
「青に なってから わたりましよう。」
と、おかあさんが おっしゃいました。

もし しんごうどうの 色が 青なら、その まま
すすんで かまいません。だいたい色の 時は 気を
つけなければ なりません。赤の 時は そこに とま
って、青に なるまで またなければ なりません。

チリリーンと ベルが なって、

青に かわりました。ふたりは
大ぜいの 人と いっしょに み
ちを よこぎって、ていりゆうじ
よの あんぜんちたいに はいり
ました。

あんぜんちたいには でんしゃ
を まつ 人が 二れつに なら
んで いました。ふたりは れつ
の うしろに つきました。





って いた 人が じゅんじゅんに のりました。すみ
えさんの まえの 人まで のると、でんしゃは っ
ぱいに なりました。

「まんいんで ございます。おあとはい この つぎの

でんしゃに ねがいます。」

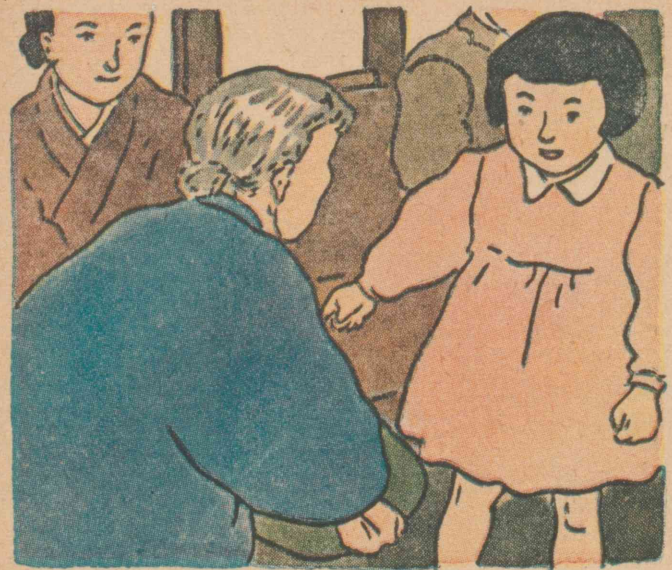
と、しゃしようさんが いいました。

すみえさんと おかあさんは しゃしようさんの い
う とおりに しました。

しゃしようさんは 出入口を しめ、チンチンと か
ねを ならして、でんしゃを はっしゃさせました。

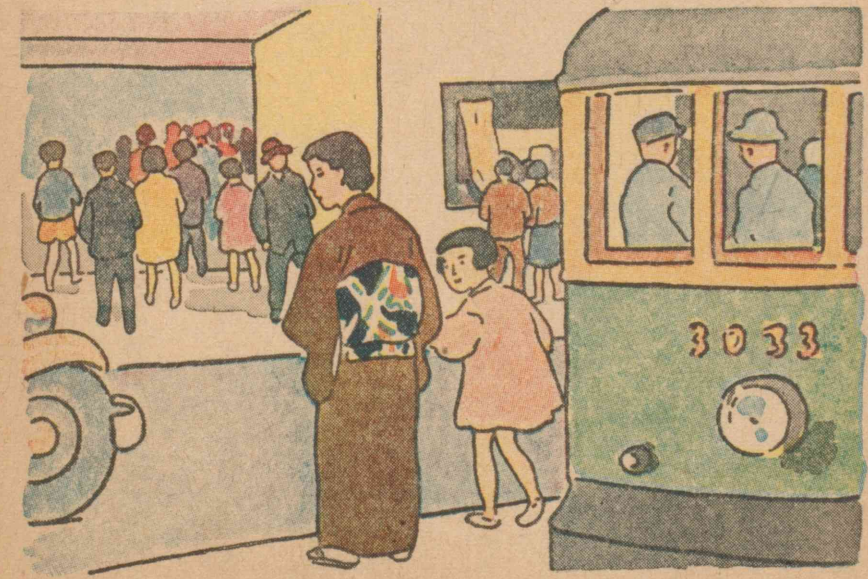
つぎに 来た でんしゃは すいて いました。すみ
えさんと おかあさんは、ざせきに こしかける こと
が できました。でんしゃは 元気の よい 音を 立
てて 走って きました。

つぎの ていりゆうじよに とまった 時、五六人の
きやくが のって 来ました。こしの まがった おば



あさんが ふろしきづつみを
さげて はいって 来ました。
すみえさんは すぐ 立ち
あがって おばあさんに せ
きを ゆずりました。学校で
先生に ならった とおりに
したのです。
「ありがとうございます。」

おばあさんは ほんとうに
うれしそくに いくども お
れいを いいました。
いくつかの ていりゆうじ
よを すぎると、でんしゃは
ひやつかてんの まえに と
まりました。すみえさんは
おかあさんに つづいて で
んしゃから おりました。お
かあさんは おりる 時に、



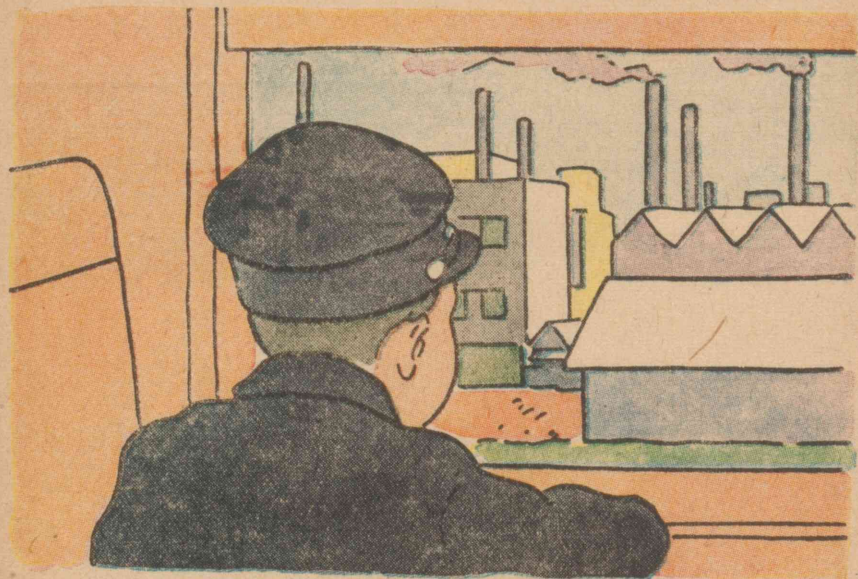


さんの うちへ 行く ことに
なりました。おかあさんは う
ちに ようじが あるので る
すばんです。おかあさんは、
「いなかは いま もみじで
きれいでしょうね。」
と おっしゃいました。
えきに つきました。えきの
とけいは 八時二十分でした。
その うちに かいさつが は

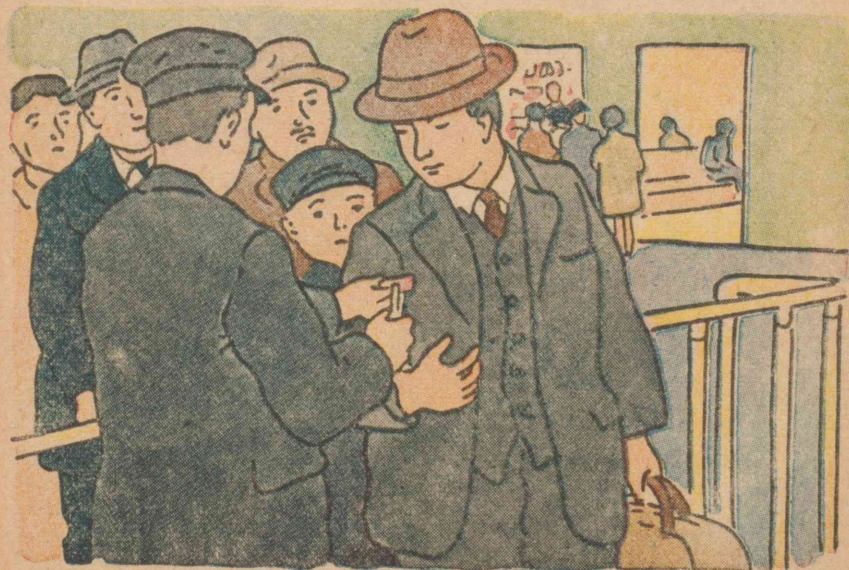
しゃしょうさんに きつぷを 二まい わたしました。
でんしゃを おりると おかあさんは よく 右左を
見て、じどうしゃなどが 来ないか どうかを たしか
めました。そして すみえさんの 手を ひいて みち
を よこぎりしました。
ひゃつかてんには たくさんの 人が 出はいりして
いました。

(二) きしゃに のって

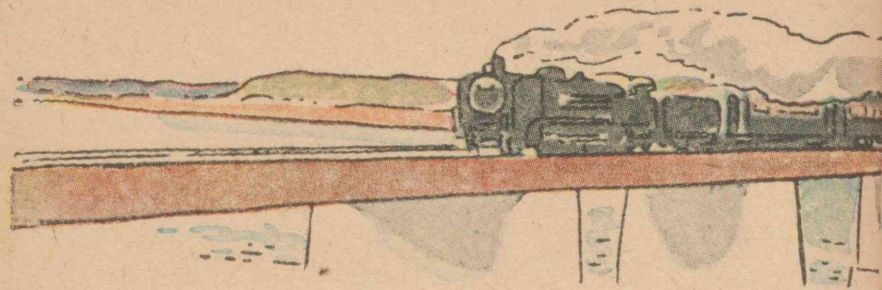
ぼくは おとうさんと いっしょに いなかの おじ



じまりました。二れつにな
 った人々が、二つのかい
 さつ口からじゅんじゅんに
 きつぷにはさみを入れて
 もらいました。プラットホー
 ムに 出ると、汽車が はい
 っ て 来ました。
 ぼくは ぎせきに すわる
 ことが できました。ベルを
 あいずに 汽車は うごきだ



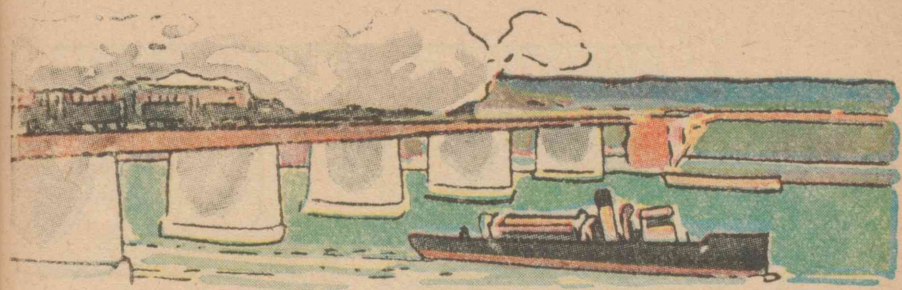
しました。ぼくは まどから
 外を ながめました。まどの
 外には こうばが たくさん
 見えます。大きな えんとつ
 が 何本も しろい けむり
 を もくもくと はいて い
 ます。
 つぎの えきにつくと、
 どやどやと 大ぜいの 人が
 のりこんで 来ました。ぼく



おとうさんも まどからのぞきました。しばらくして つぎの えきにつきました。

えきを 出ると、きゆうに ひろびろとした所に 出ました。田や はたけが見えます。田は もう かりいれがすんで、いねの きりかぶがのこっています。おひやくしようさんのすがたも 見えます。

汽車は どんどん 走って 行きます。



の まえに 学生の 人が こしかけました。まもなく、ゴオーツと いう音がして、汽車は 大きな てつきようの上に来ました。まどから 見ると、川の きしでは 牛が くさを たべていました。てつきようの 下を ふねがとおって いました。

「おとうさん、ふね ふね。ふねが とおって いますよ。」

「どれ、どれ。あ、大きな ふねだね。」

汽車に のつてから もう 一時間はんほど たちま
した。

おとうさんは、

「はるお、りんごでも たべようか。」

と おっしやつて、かばんの 中から りんごを 出し
て かわを むいて くださいました。

やがて 大きな えきに

つきました。大ぜい おりま

した。学生の 人も おりま

した。



むこうの プラットホーム
にも 汽車が とまって い
ます。

のみものや しんぶんや

ざつしなどを うる 人の

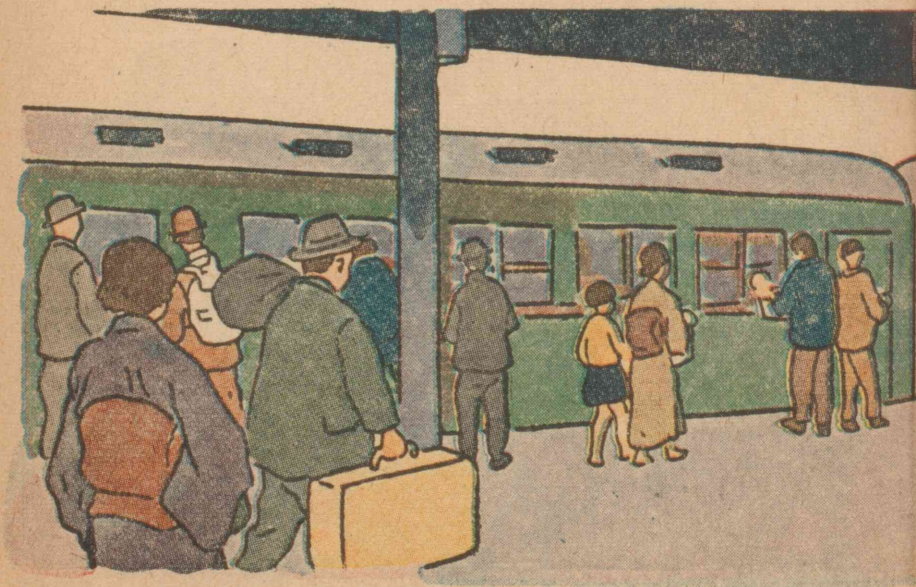
声が、にぎやかに きこえま

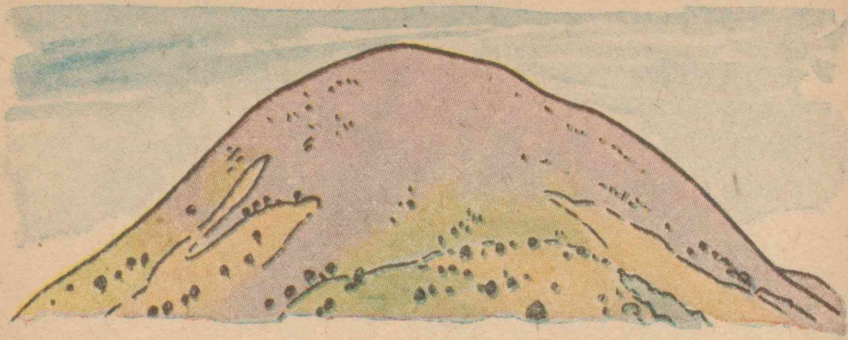
す。大きな かばんを さげ

た 人が 走って 行きます。

にもつを たくさん つんだ

手おしぐるまを いそがしそ





かおは うれしそうでした。
もう 三時間 ちかく 汽車に のつ
て います。西の 空に、まるい かた
ちの 高い 山が 見えて きました。
「はるお、もう すぐだよ。おじさんの
うちでは みんな まって いるだろ」
うね。」
と、おとうさんが おっしゃいました。
その うちに 町が 見えて しまし
た。

うに おして 来る えきの
人も あります。
やがて 汽車は また 走
りだしました。こんど ぼく
たちの ぎせきの まえに
すわった 人は おひやくし
よりの おじさんでした。お
とうさんに たばこの 火を かりました。
おとうさんと おじさんは はなしを はじめました。
ことは 米が よく とれたそうです。おじさんの

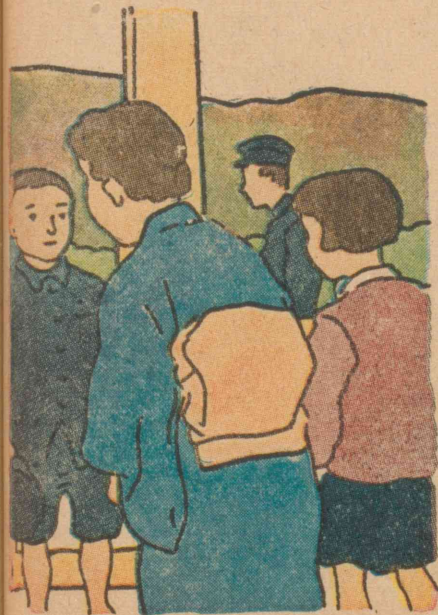


「ここまで 来ると、いつも おとうさんは 子どもの
ころを おもいだすよ。」

とおっしゃって、おとうさんは まどの 外を なが
めて いらっしやいました。

汽車は どうとう えきに つきました。 わすれもの
がないように 気を つ
けて、ぼくは おとうさん
に 手を ひかれて プラ
ットホームに おりました。

この 汽車は まだまだ



のはらを 走ったり ト
ンネルを くぐったり
して とおく とおく
行くのでしよう。

ぼくは 汽車に さよ

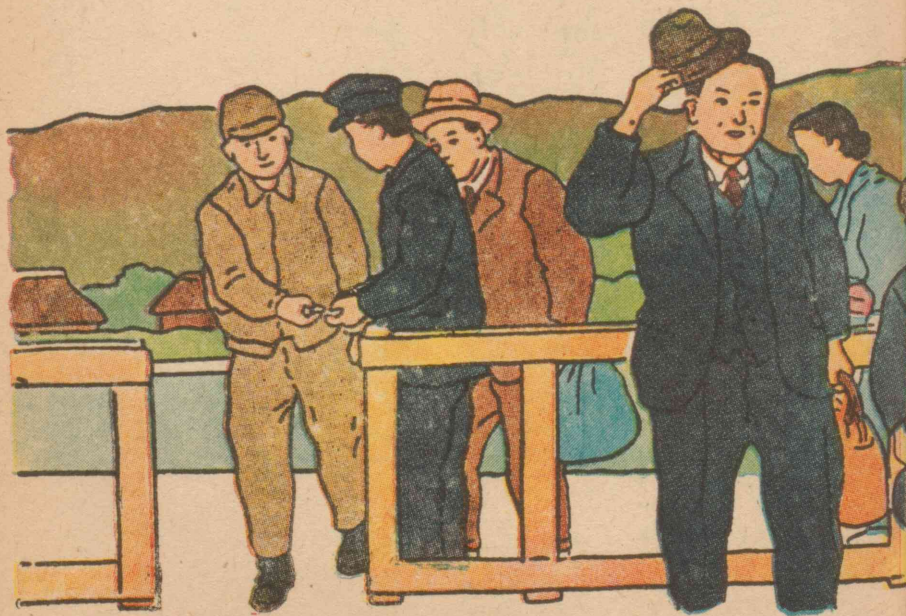
うならと いいました。

えきの 出口に おば

さんと いとこの とし

子さんが むかえに 来

て いました。



三 きれいに しましう

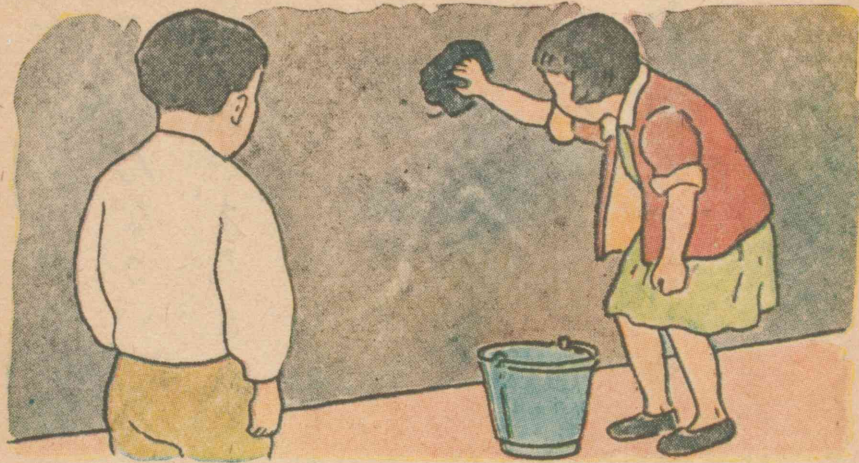
(一)

あつ子さんが 学校から かえって みますと へい
に らくがきが 書いて ありました。三りん車と さ
かなの えが 書いて ありました。さかなには ひげ
が 二本 ぴんと はねて つけて ありました。はく
ぼくで 書いて ありました。あつ子さんは いたずら
を したのは おとうどの まさおでは ないかと 思

いました。

あつ子さんは バケツに 水を
くんで 来ました。そう して
ぞうきんで らくがきを ふきは
じめました。なかなか きえませ
ん。

そこへ まさおさんが やって
来ました。あつ子さんが、
「これを 書いたのは まさおち
やんでしう。」



ど いますと、まさおさんは、
「ごめんなさい。」
と あやまりました。そして じぶんで いっしょうけ
んめいに けしました。

(二)

日が あたたく さして います。よし子さんの
おかあさんが せんとくを して います。よし子さん
も 小さな たらいに おゆを 入れて、じぶんの 下
ぎを せんとくします。

よし子さんは 下ぎの よ
ごれた 所に せっけんを
つけました。そして えりの
所から あらいはじめました。
りょう手で もみますと ま
っ白な あわが たくさん
できました。

おかあさんが よし子さん
の あらって いるのを 見
て、





「じょうずですね。」

と 良かったです。

きれいな おゆが よごれました。

「おかあさん、こんなにおゆが よごれました。」

と、よし子さんが いますと、おかあさんは、

「下ぎに ついて いた あかが せっけんと いっし」

よに おちたからです。」

と 答えました。

よし子さんは こんどは ポンプで 水を くみまし

た。たらいに いっぱい くんて あらった 下ぎを

ゆすぎました。もう 一ど

ゆすぎました。さいごに お

かあさんが ゆすぎました。

「こんなに きれいに なり」

ました。これからは とき

どき おてつだいを して

ください。」

と、おかあさんが いました。

おかあさんは せんとくし

たものを さおに とおして ほしました。
あらった 下ぎに 日が あたつて まっ白に 見え
ました。

(三)

おばあさんが ふろを わかして います。かまどに
たきぎを 入れて います。かまどの 中で 火が ま
っかに もえて います。パチパチと はぜる 音が
きこえます。

「もう わきましたよ。あさおは おじいさんと さき

に おはいらなさい。」

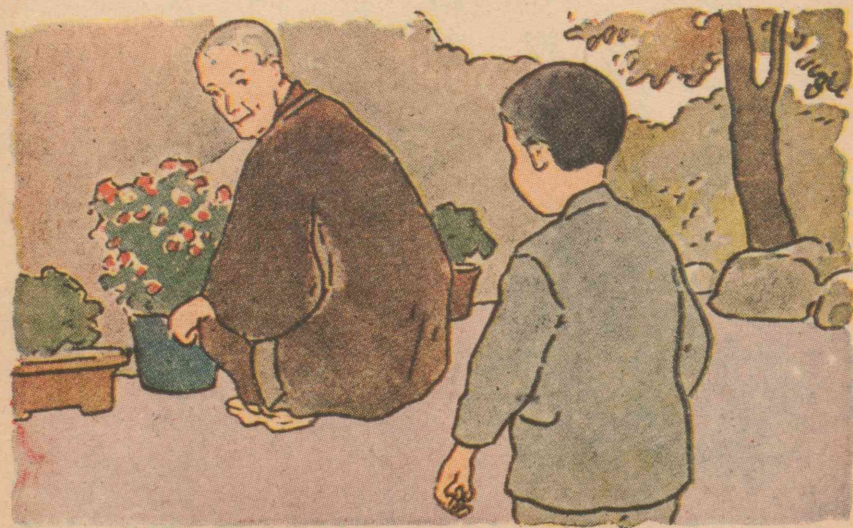
と、おばあさんが いました。
ので、あさおさんは おじいさ
んを よびに 行きました。

おじいさんは うえきの せ
わを して いました。

あさおさんが、

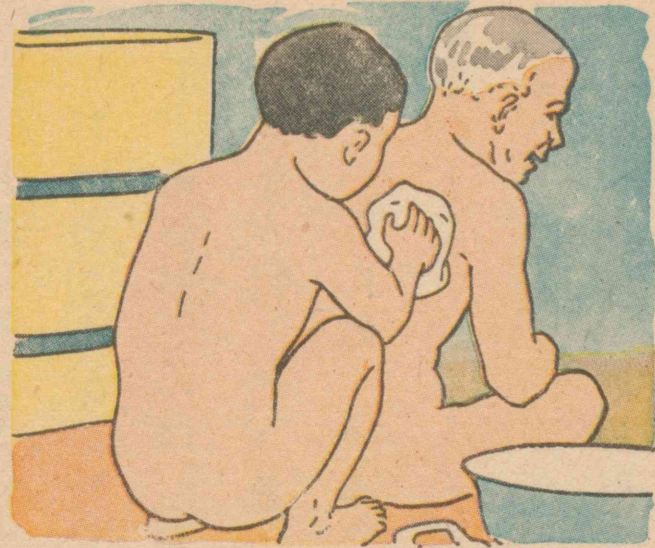
「ふろが わきましたよ。」

と いますと、おじいさんは、
「どれどれ、それでは いる」



と しょうか。」

と いった、しごとを やめました。



あさおさんは おじいさん
と いったしよに ふろに は
いりました。おじいさんが
あさおさんの からだを て
いねいに あらいました。
「あさおは 何を して あ
そんで いたのかな。こん
な 所に だろが ついて

いるぞ。」

おじいさんは あさおさんの だろを 手ぬぐいで
おとしました。

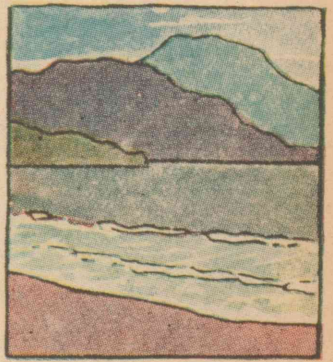
あさおさんは おじいさんの せなかを あらいまし
た。手ぬぐいに せっけんを つけて、カいっぱい こ
すりしました。

「おじいさん、いたいですか。」

と、あさおさんが いますと、

「ちつとも いたく ないよ。」

と、おじいさんは わらいながら 答えました。



四 ことばあつめ

(一) なかよしの ことば

「白」と「ゆき」は なかよしの ことばです。
「くろ」と「すみ」は なかよしの ことばです。
「高」と「山」も なかよしの ことばです。
「ひろ」と「海」も なかよしの ことばです。
ことばには このように よく にあう なかよしの
ことばが あります。

はるおさんが なかよしの ことばを あつめました。
「さとう」 「あまい」
「ボール」 「まるい」
「でんとう」 「あかるい」
よし子さんが なかよしの ことばを あつめました。
「いと」 「ほそい」
「ごおり」 「つめたい」
「おかあさん」 「やさしい」
なかよしの ことばは まだ あるでしょう。

みんなであつめて みましよう。

(二) はんたいの ことば

高いと ひくいは はんたいの ことばです。

おもいと かるいは はんたいの ことばです。

上と 下も はんたいの ことばです。

おもてと うらも はんたいの ことばです。

ことばには このように はんたいの ことばが あります。

はるおさんが はんたいの ことばを あつめました。

大きい 小さい

深い 浅い

ひろい せまい

よし子さんが はんたいの ことばを あつめました。

ふとい ほそい

どおい 近い

あつい さむい

はんたいの ことばは まだ あるでしょう。

みんなであつめて みましよう。

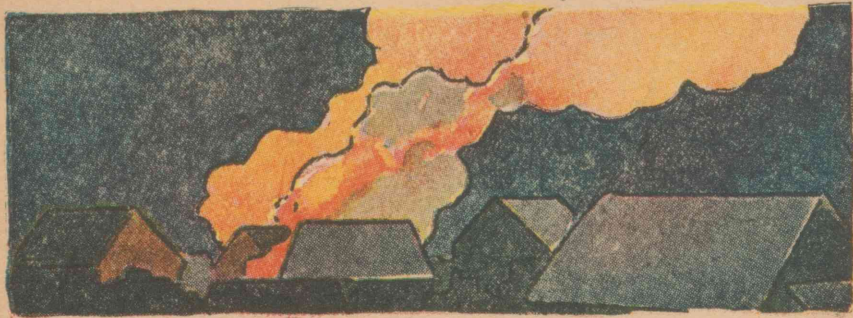
五 しょうぼう

(一) かじ

「かじですよ、かじですよ。」
「なんだか そんな 声が したよう」
に 思いました。ぼくは びっくりし
て とびおきました。おかあさんが、

「早く、早く。」

と、いきなり ぼくの 手を ひっぱりました。ぼくた



ちは いそいで おもてへ 出ました。
おとうさんは かじの 方へ いそいで
かけて 行きました。

道の むこうの 家が まっかです。

パチパチと 木の もえる 音が きこ
えます。火のこが ぼくたちの 方へ
とんで 来ました。火は だんだん 大
きく なって 行きました。近所の 人
が、

「かじだ、かじだ。」

と 行って、走って いきます。しょうぼうじどう車のサイレンの音が しました。おとうさんが かえつて来て、

「もう ポンプが 来たから だいじょうぶだよ。」
と いました。

(二) しょうぼうしよ

しょうぼうしよを 見に行きました。

しよちようさんも しょうぼうしゆさんも いろいろ しんせつに 話して くれました。しよちようさんは、

「きみたちに しょうぼうじどう車が 水を 出す ところを 見せて あげよう。」

と いました。

「わあっ、うれしいな。」

と、みんなは 大きな 声を あげました。

ピリ ピリ

しよちようさんが ふえを ふきますと、しょうぼうしゆさんが 見て いる まに したくをして、すばやく じどう車に とびのりました。

つぎの あいずで、じどう車が いさましい 音を

立てて 走り出しました。

れんしゅうなので すぐ とまりました。

しょうぼうしゆさんが ホースを 長く のばしまし

た。ひとりが 足を ふんばって、ホースの つつ先を

もちました。

池の 中へ 水を すいこむ くだを 入れました。

ブルルル

エンジンが うごいて います。ホースが つぎつぎ

に まるく ふくらんで いきます。

びつくりするような 音で 水が いきおい よく

とび出しました。

水は 家よりも 高く あがつ

て、大雨のように ふりかかって

きます。

「すごい、すごい。」



みんなは手をたたきました。

エンジンがとまりました。そこで、しよちようさんがこんな話をしました。

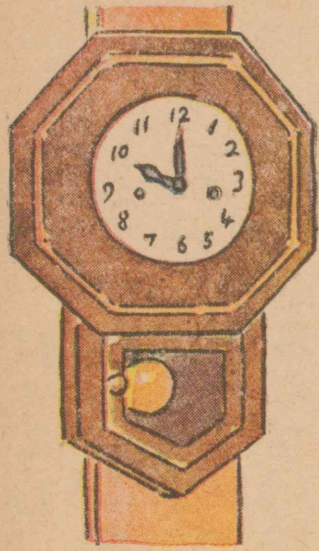
「こうしてわたくしたちは火をけすのです。ポンプの力もわかったでしょう。もしかじが見つかつたら、できるだけ早くしらせてください。すぐけしに行きますよ。しかし、かじをおこさないようじんが一ばんですね。」

ぼくたちはしよぼうしよの人たちにおれいをいってかえりました。

六 はしらどけい

夜の十時になりました。はるおさんの家では、おとうさんもおかあさんもはるおさんもいもうどのゆき子さんもみんなねてしまいました。家の中はしずかです。カッチン、カッチン、はしらどけいだけがただひとりやすみなしに音を立てています。

ふりこ「カッチン、カッチン。おい、みじかい はりくん、



は長
りい
「だめ、だめ。ぼくら
がねむったら、ど
けいがとまって
しまうじゃ
ないか。」

とけいがとまったら 学校
へ行く時こくがわから
なくなつて はるおくんは
ちこくをするかもしれな

長い はりくん、こ
んなに 夜も 昼も
うごいて いるのは
かなわないね。すこ
し やすもうじゃ
ないか。みんなが
気もちよさそうに
ねて いるのを 見
ると、ぼくらだつて
ちよつと ねむつて



いよ。ぼくらは やすまないで 夜も 昼も う
ごくのが しごとなんだからね。」

ふりこ 「カッチン、カッチン。それは そうだよ。だけど」
も きみみたいに 五分も かかって もじから
もじへ 一つだけ うごくんだったら のんきで
いいけど、ぼくみたいに 一びょうに 一ど カ
ッチン、カッチン、うごく ものは いそがしく
て やりきれないよ。カッチン、カッチン。」

は長
りい 「なるほど。きみは いそがしくて お気のどくだ
よ。さぞ つかれるだろうと 思うよ。だけど

みじかい はりくんなんか ぼくより まだ の
んきなんだからね。一時間も かかって もじか
ら もじへ 一つだけ うごいたら いいんだか
らね。うらやましく なるよ。」

はみ
じかい
り 「おい、じょうだんは やめて くれよ。なるほど、
ぼくは すこししか うごかないから、なまけもの
みたいに 見えるかも しれないけれど、ねむく
なるのを がまんして すこしずつ うごくのも
つらい ものだよ。元気で カッチン、カッチン、
一びょうごとに うごいて いる ふりこくんの



も はるおくんは、おかあさんから ならって
 いたじゃ ないか。『ほら、もじが 一 二 三

いても かんじんの はるおくんが ぼくたちの
 かおを よく 見ないんだもの。つまらないね。

カッチン、
 カッチン。」

は長
 りい「そんな
 ことは
 ないよ。

この 間”

方が どれだけ いいか しれ”
 や しないよ。」

ふりこ 「そうかなあ、カッチン、カッチン。

でも こんなに いそがしく か”

らだを うごかして いるのも

つかれるよ。カッチン、カッチン。」

みじかい
 はり 「だから つかれを なおす ために、五日に 一”

どは ねじを まいて もらって いるじゃ な”
 いか。さあ、元気を 出して はたらこうよ。」

ふりこ 「でもね。カッチン、カッチン。せつかく はたら”



四 五 六 七 八 九 十 十一 十二。十二

あるでしょう。みじかい はりは 何時と いう
時こくを さします。長い はりは 何分と い
う 分を さすのです。わかつたでしょう。はり
は 両方とも むかつて 左から 右へ まわる
のですよ。と、おかあさんが おしえて いたじゃ
ないか。

- 62 -

ふりこ「うん、カッチン、カッチン。そうだったね。でも
はるおくんは あの 時 わかつたような かお
を して いなかったよ。カッチン、カッチン。」

みじかい「だいじょうぶ わかるよ。はるおくんは 二年生
なんだもの。」

は長り「そうだよ。きのうも『あ、八時三十分だ。もう
行かなくっちゃ。』と 行って、かばんを かけて
出かけて いったじゃ ないか。」

ふりこ「あつ、そうだったね。カッチン、カッチン。けれ
ど、ぼくらの かおも よごれたね。まえは ず
いぶん 白かったじゃ ないか。カッチン、カッ
チン。」

- 63 -

みじかい「うん、もう この 家に 来てから 十年に な

るよ。はるおくんのもうまだ生まれないままだ
ったからね。

は長
りい「はるおくん」

んにた

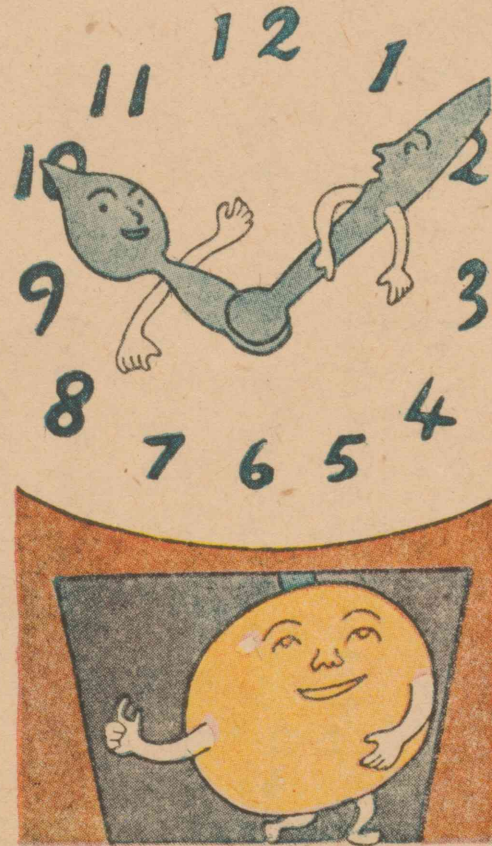
のんで

すこし

きれいに

ふいて

もらおうかな。ふりこくん、きみは声が大きい
いからたのんでみてくれないかね。



はみじかい「それがいい。でもはるおくん、ぼくらのか

おにとどくかしら。」

は長
りい「ふみだいかいすにのればとどくよ。ね、ふ
りこくん、たのんでみてくれないか。」

ふりこ「ああ、いいとも、カッチン、カッチン。そして
元気ではたらこうよ。カッチン、カッチン。」

そうだができたので、とけいはまたカッチン、
カッチン、元気な音を立てていきます。

七 ゆき

(一) ゆきが ふる

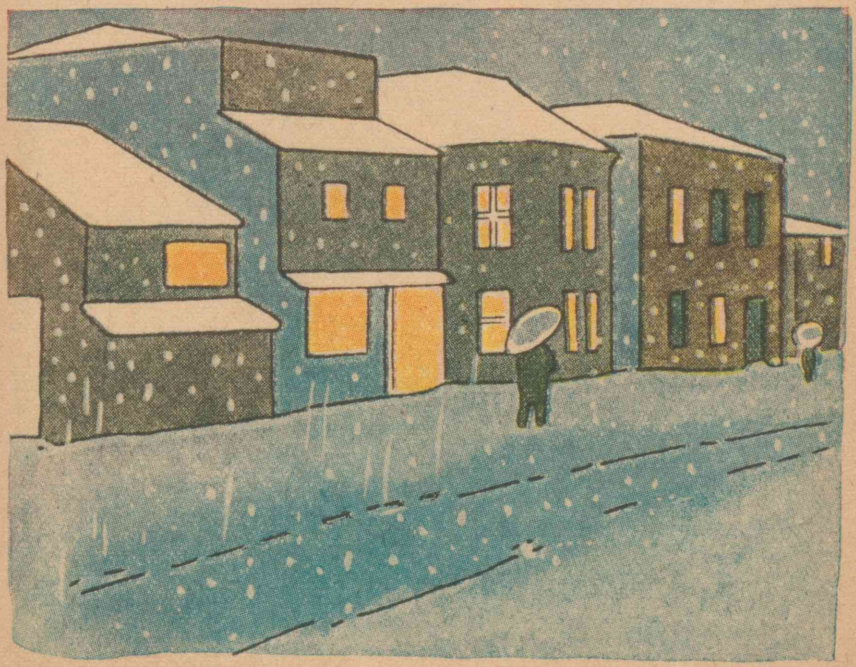
さらさら さらさら

ゆきが ふる。

日ぐれの 町に

ゆきが ふる。

かさ さして 行く



大どおり。

あかりが ちらちら

もれて いる。

さらさら さらさら

ゆきが ふる。

さらさら さらさら

つもる ゆき。

夜ふけの さとに



つもる ゆき。

村の はずれの

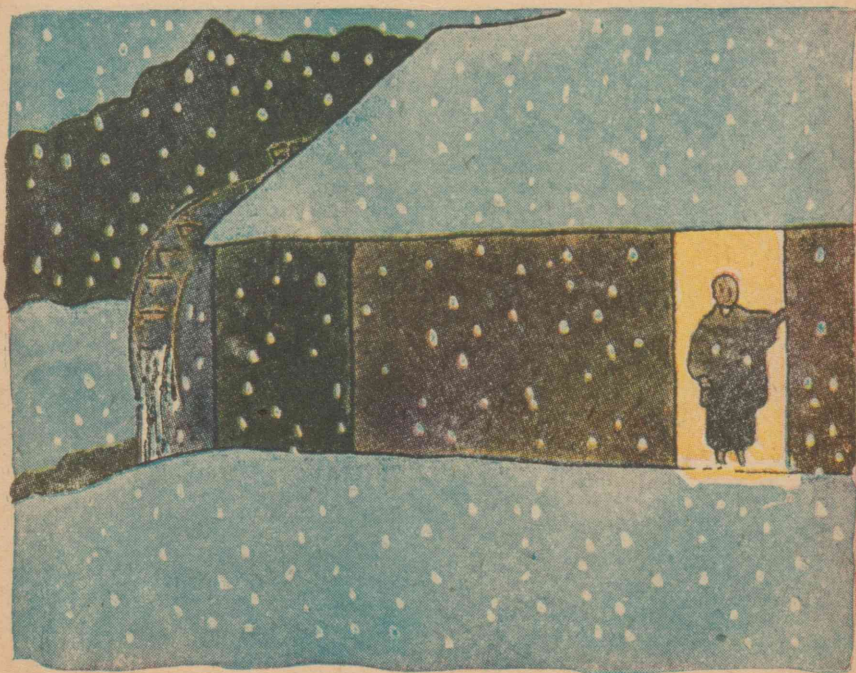
水車小や。

じいさん ひとり

おきて いる。

さらさら さらさら

つもる ゆき。



(二) ゆきの あさ

あさ 早く はるおさんが 目を さまして まどの
方を見ると、となりの やねが まっ白に なって
いました。

「あ、ゆきだ。ゆきが ふった。」

はるおさんは いそいで とびおきました。

おとうさんと おかあさんは もう おきて いまし
た。まもなく いもうどの ゆき子さんも おきて き
ました。

「ずいぶん つもつたなあ。ゆきかきが 大へんだ。」
おとうさんが えんがわから 外を ながめながら
いました。ゆきが 三十センチほど つもつて いま

はるおさんは かおを あらうと すぐ おもてに
出て みました。見わたす かぎり まっ白な ゆきが
あさ日を うけて きれいに 見えました。

にわの 方へ まわつて みました。はるおさんの
長ぐつが すぼり すぼりと ゆきの 中には いらいこ
みます。ものほしざおにも ゆきが つもつて います。

池の 所が すこし 黒ずんで いるだけで、あとは
みんな まっ白です。

はるおさんは 池の 所
まで あるいて 行きました
た。池には うすい こお
りが はつて いました。

うめの 木の そばに
ゆきが 高く つもつて
いました。はるおさんは
その 上に かおを おし



つけて みました。まっ白い ゆきの 上に はるおさ
んの かおの かたちが できました。

はるおさんが また おもての 方へ まわって 行
きますと、おとうさんが 大きな ゆきかきを かつい

で 出て 来ました。

「おとうさん、ぼくも てつ
だいますよ。」

はるおさんは 大きな 声
で いいました。



ものおきへ 行って 竹ぼう
きを もって 来ました。

おとうさんは ゆきかきで
家の まえを かきはじめて

います。はるおさんは おと
うさんの かいだ あとを

ほうきで はいて 行きました。ふりかえって 見ると、
ふたりで つくった 道が 長く つづいて います。

しんぶんやさんが ぼうしの 上に ほおかむりを
して かけて 来ました。

「おはよう。」

しんぶんやさんは にこにこ しながら、はるおさん
に しんぶんを わたして また かけて 行きました。

(三) ゆきあそび

はるおさんは ただしさんや よし子さんたちと 学
校から かえって 来ました。かえる 道で、

「ぼくの うちで みんなで あそばないか。」
と、はるおさんが いいました。

「うん、あそぼう。ゆきだるまを つくろう。」

と、ただしさんが いいました。

「うさぎも つくりましようね。」

と、よしさんが いいました。

はるおさんが 家で まって

いると、まもなく ただしさん、

よし子さん、あさおさんが あ

そびに 来ました。はるおさん

は いどの 先に 小さな す

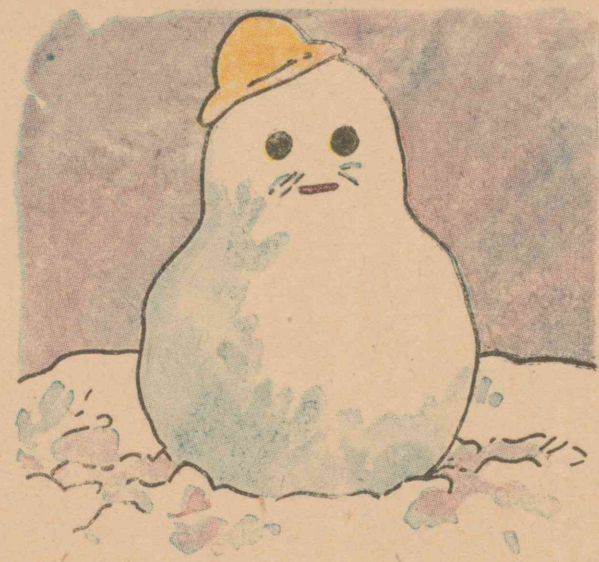
みを つけました。みんな

かわりばんこに ゆきつりを



しました。ゆきの 上に いどの 先を たれると 小
さな すみの まわりに ゆきが つきます。何べんも

くりかえすと だんだん 大
きく なって いきます。

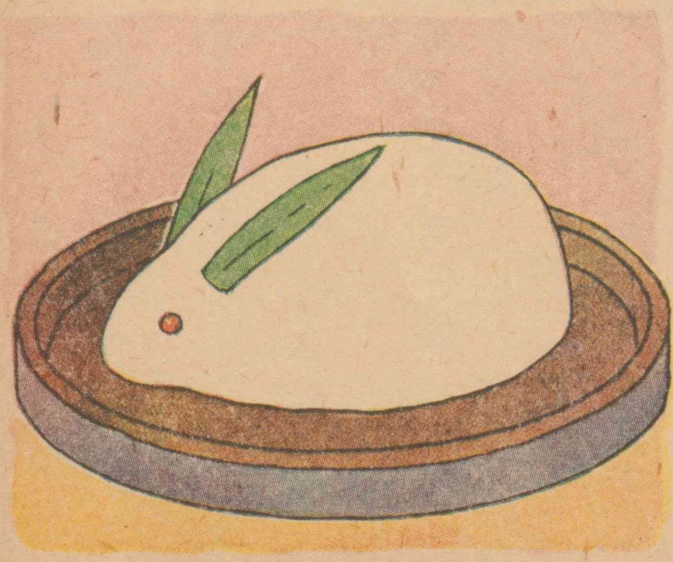


りました。たどんで 目を つけました。まつのはで

しばらく ゆきつりを し
てから こんどは ゆきだる
まを つくりました。みんな
で ゆきを はこんで 来て、
大きな ゆきだるまを つく

ひげを つけました。はるおさんが ものおきから ふ
るい むぎわらぼうしを さがして 来て かぶせまし
た。そばで しろが うれし
そうに わんわん ほえまし
た。

こんどは うさぎを つく
りました。赤い なんてんの
みで 目を つくりました。
ささの はを とつて 来て
長い 耳も つけました。



ハゆうびん

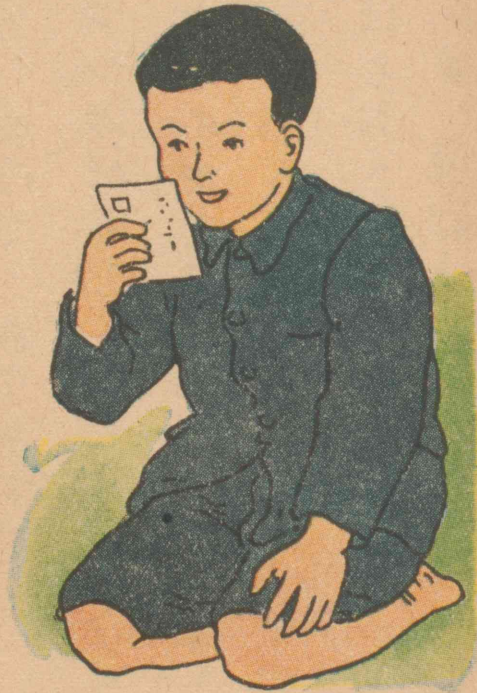
(一) 小づつみ

「ただいま。」

はるおさんが 学校から かえって 元気に あいさつを しました。

「はるおさん、とても うれしい ことが ありますよ。」
「何ですか、おかあさん。」

おかあさんは だまって はがきを わたしました。



「はるおくん、二月十二日は きみの たんじょう日でしたね。ことしは ようが あつて しい ようが あつて おいわいに 行けません。」

その かわりに 本を おくります。わたくしが ちょうど きみぐらいの ころに 大すきだった 本です。きみにも おもしろいだらうと 思います。」
はがきには そう 書いて ありました。

「小づつみは これですよ。」
と、おかあさんが じょうぶな
かみで つつんだ 小づつみを
わたしました。ひもが しっか
りと かけて あります。
つつみがみを とると、「イソ」
ツプものがたりと 書いた き
れいな 本が 出て きました。
はるおさんは パラパラと
めくって みました。おもしろ



そうな 話ばかりです。

はるおさんが 声を 出して よんで いると、

「はるおさん、ごはんですよ。」

おかあさんの 声が きこえました。あたりは もう
暗く なって います。

夕はんが すんでから、はるおさんは おとうさんが
ら ふうとうと びんせんを もらって、おじさんに
おれいの 手がみを 書きました。

おじさん、とても おもしろい 本を ありがとう



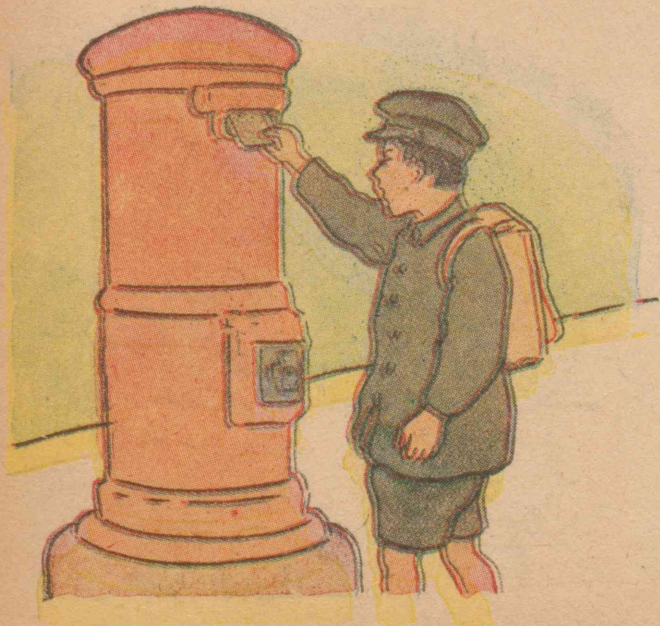
ございます。うれしくて
うれしくて たまりません。
もう 十ページも よみま
した。
学校の お話かいで『ライ
オンと ねずみの 話を
して みようと 思って
います。

さようなら

二月八日

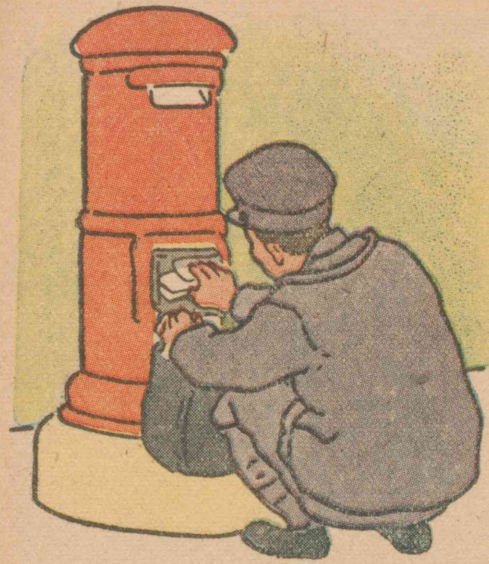
はるおさんは おとうさんに ふうどうの
書き方を おしえて いただきました。
そして きつてを もらって
はりました。

あくる日 はるおさんは
学校へ 行く 道で その
手がみを ポストに 入れ
ました。



(二) ポストから 手がみの とどくまで

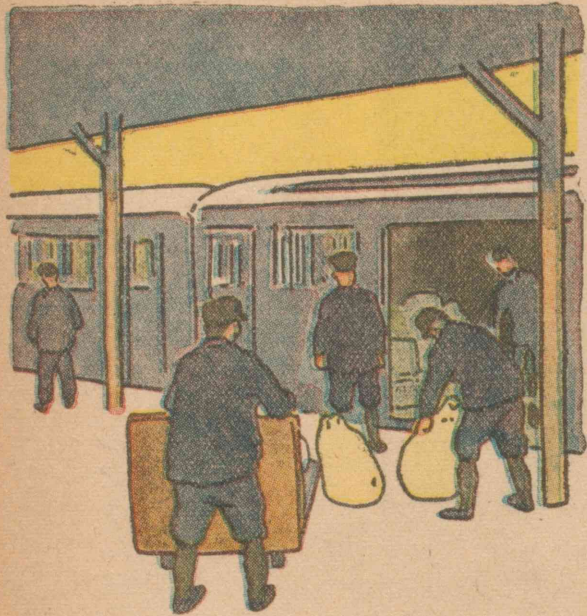
(1) ゆうびんやさんが ポストを
あけて 手がみや はがきを 取り
出します。



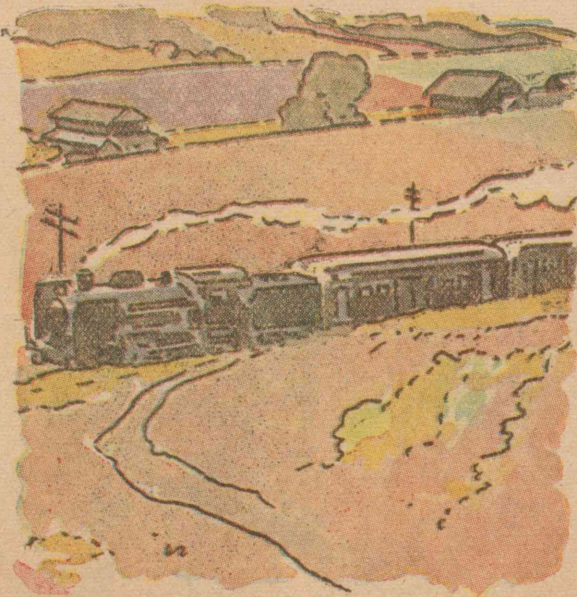
(2) ゆうびんきよくに あつまった
手がみや はがきは、あてなに よ
って 分けられます。



(3) 分けられた 手がみや はがき
は ふくろに 入れられ、汽車に
つみこまれます。



(4) 手がみや はがきも 汽車の
たびを します。はるおさんの 書
いた 手がみも のって います。



(5) えきについて ゆうびんきょくに 来ました。ゆうびんやさんは すぐはいたつに 出かけます。



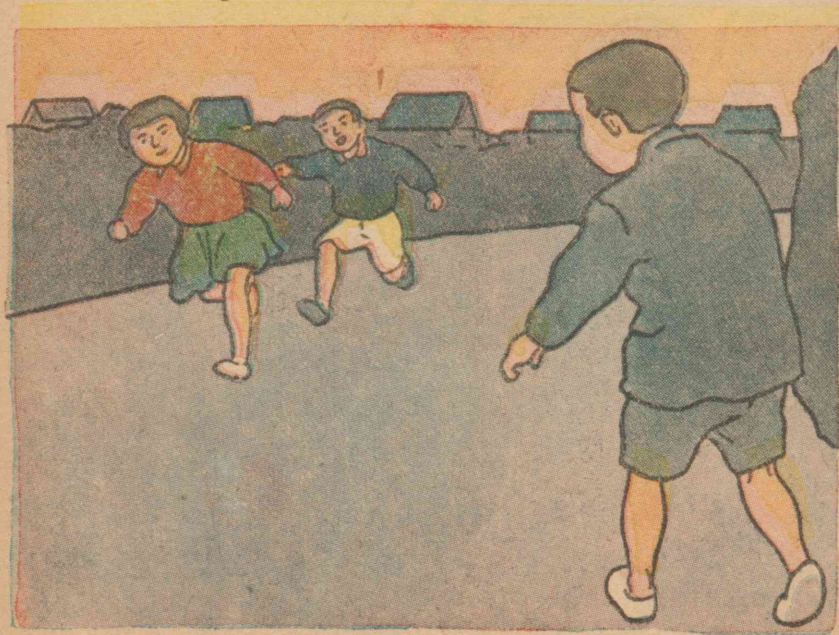
(6) ゆうびんやさんが はるおさん の 手がみを おじさんの 家にとどけました。

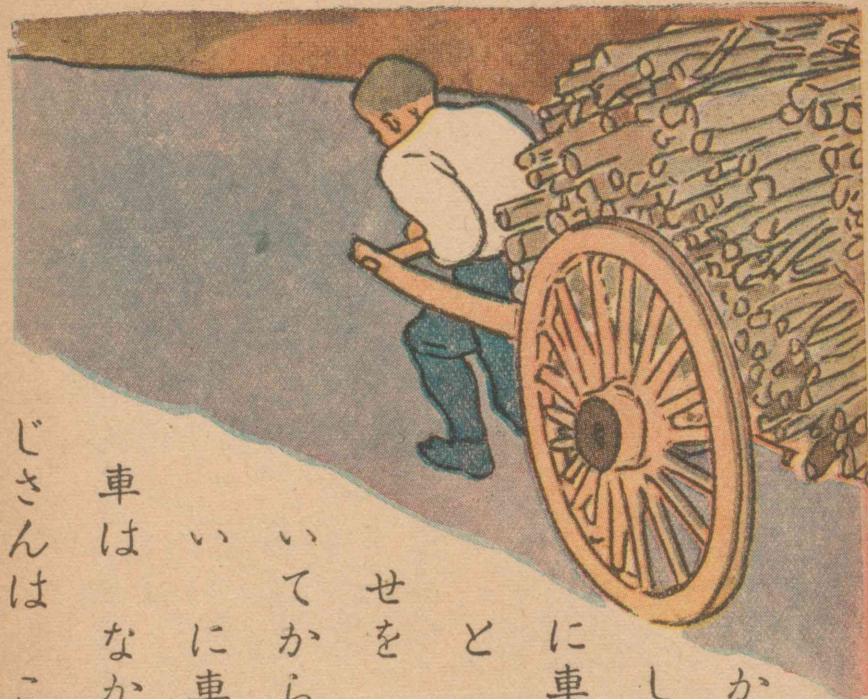


九 どうわ

(一) 町のひ

夕方、はるおさんが 家の前で あそんで いました。ただしさんや あつ子さんも いっしょでした。すると、むこうから まきを たくさん つんだに





います。うまく 上れる
 かしらと、はるおさんは
 しんぱいになりました。
 に車の おじさんは ちよつ
 と やすんで ひたいの あ
 せを ふきました。あせを ふ
 いてから おじさんは カいっば
 い に車を ひっぱりました。に
 車は なかなか うごきません。お
 じさんは こまったような かおを

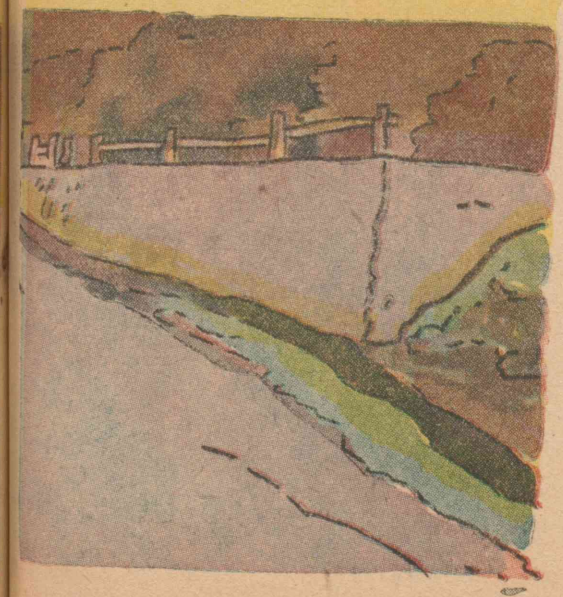


車が や
 っ て 来ま
 した。にも
 っ が おもい
 のでしよ、ゆ
 っくり ゆっく
 り やつて 来ま
 す。道は はるお
 さんの 家の 前か
 ら 坂に なつて

しました。はるおさんは 車の後へ 走って 行きました。ただしさんも あつ子さんも 走って 行きました。

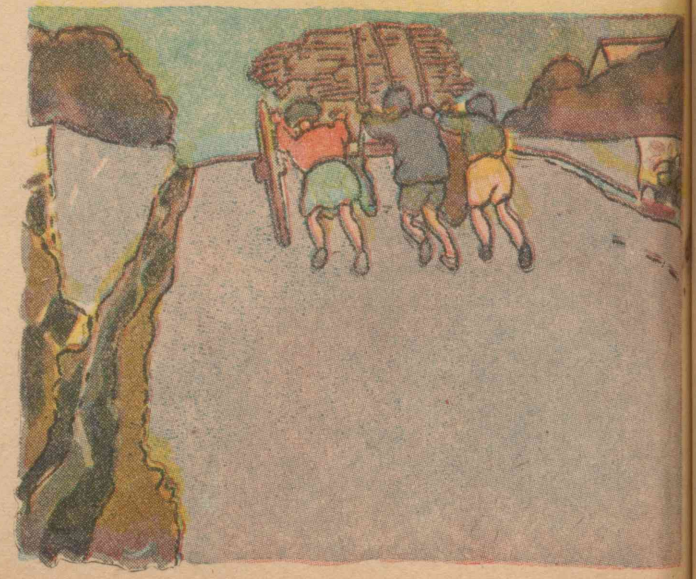
「おじさん、おして あげましよう。」
と、みんなで いいました。

「ありがとう。」
と、おじさんは うれしそうに 車を ひきはじめました。に車は 少し うごきました。はるおさんたちも う



れしく なりました。カいっぱい おしました。

だんだん うでが いたくなつて きました。でも 手を ゆるめると に車は すぐ あともどりを しそうです。少しも 手を ゆるめることが できません。三人は うんうん いいながら おしました。に車も うんうん いて いるように 思われました。





坂の上の方に空が見えて
きました。赤い夕やけの
空です。もう坂の上はすぐ
だと思いました。

坂の上に来ました。そこは
たいらになっていました。

「ありがとう、ありがとう。みんな
のおかげで上れましたよ。」

おじさんはうれしくてたまらないようにおれい
をいいました。おじさんのかおにもみんなのか

おにもあせがながれて
いきました。

はるおさんはかえろ
うと思いました。

むこうを見ると町の
ひがいつぱいにキラ
キラとかがやいていまし
た。



「ああ、きれい、きれいだな。」

と、はるおさんは 大きな 声で いいました。

「きれいですね。たくさん ひが あつまると あんなに
きれいに 見えるのですよ。」

と、おじさんは につこり わらいながら いいました。

はるおさんたちも うれしく なりました。

はるおさんたちは おじさんに、

「さようなら。」

と 行って、元氣 よく 坂を おりて 行きました。

(二) 春の 空へ

あきらさんが ひばりの 子をつかまえたのは、き

よ年の 春の おわりの ころでした。さかなどりの

かえり道でした。はたけ道には れんげの 花が まだ

あちら こちらに のこって いました。あきらさんが

あるいて 行くと 道ばたを 小さな ひばりの 子が

ぴよんぴよんと あるいて いました。見ると 少し

足を いためて いるようでした。

あきらさんは ぼうしで おさえて つかまえました。

くちばしは きいろい
し、あたまには たんぽ
ぽの みのような けが
ふわふわ はえて いて、
それは それは かわい
らしい 目つきを して
いました。

ひばりの 子は きず
が いたむのでしょうか、
あきらさんの 両手の



中で ときどき 小さな 足を うごかして もがきま
した。あきらさんは 家に もって かえって かわい
がって やろうと 思いました。

あきらさんは ひばりの 子を すなを しいた か
この 中に入れて 大せつに そだてはじめました。
あきらさんは まい日 学校へ 行く 前に ひばり
の 子に やる すりえを 作りました。やいた おさ
かなど なのはど お米の こなを 小さな すりばち
ですって 水を まぜました。それを 竹の へらで

すくつて たべさせて やりました。

あきらさんが かごの そばまで 行くと、ひばりの
子は うれしそくに 小さな はねを ひろげ、ぴいぴ
いぴいと なきました。きいろい 口を 大きく あけ
て えさを ほしがりました。

やがて ひと月も たつと、ひばりの 子は あわを
たべるように なりました。だいぶ 大きく なつて、
よろこんだ 時には あたまの けを くじやくのよう
に さかだて、むねを はつて、かごの 中を あるき
まわるように なりました。

それを 見て あきらさん

んの おとうさんは、

「ほほう、これは おすら

しいぞ。いまに よく

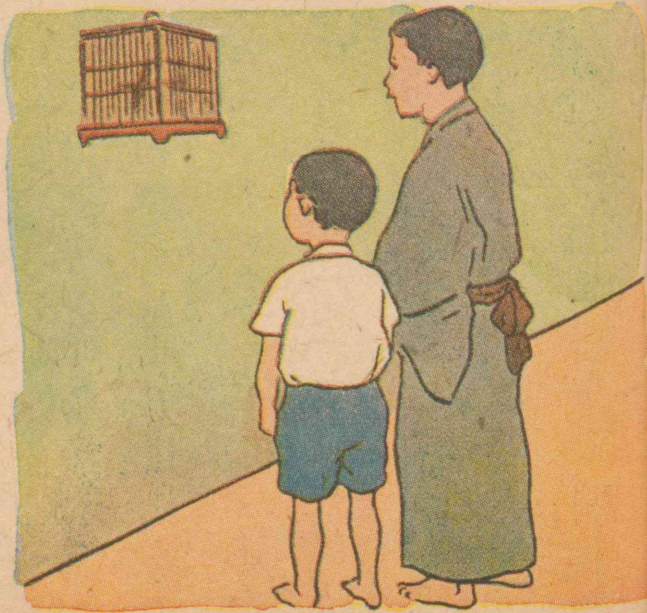
さえずるよ。」

と いいました。

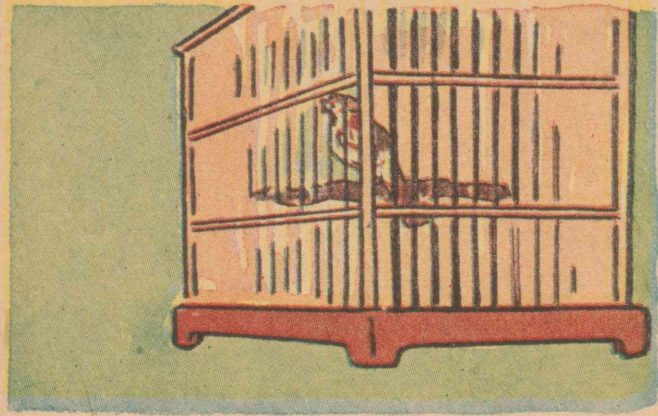
その うちに ひばりの

子は ときどき かんがえ

るような ようすを しました。小さな 声で うたの
れんしゅうを して いるようでした。秋の はじめご



ろに になると、近所の 家まで ひびくほど 大きな
声を はりあげて さえずるようになりました。



冬が 来て のはらには さむい
北風が ふきはじめました。しかし
あきらさんの 家では、日の あた
つて いる にわで、一日中 ひば
りが あかるく さえずって いま
した。道を とおる ひとびとは、
「おや、よい ひばりだな。」

と いった かごを 見
あげて 行きました。

しかし その うちに、
大へん こまった こと
が おこって きました。
それは ひばりに たべ
させる あわが だんだん
と 少なくなつて きた
ことです。



あきらさんは ひばりの 声を きく たびに しん
ぱいで しんぱいで たまらなく なりました。それを

見た あきらさんの おかあさんは、近所の 家へ 出
かけて 行って、あわが あるか どうかを きいて
くれました。でも、どこにも 小どりに たべさせる
あわなどを しまつて ある 家は ありませんでした。
やがて さむい 空から ちらちらと ゆきが ふり
だし、たちまち 山も はたけも まっ白に なりまし
た。

ある さむい あさ、あきらさんは おかあさんに
いいました。

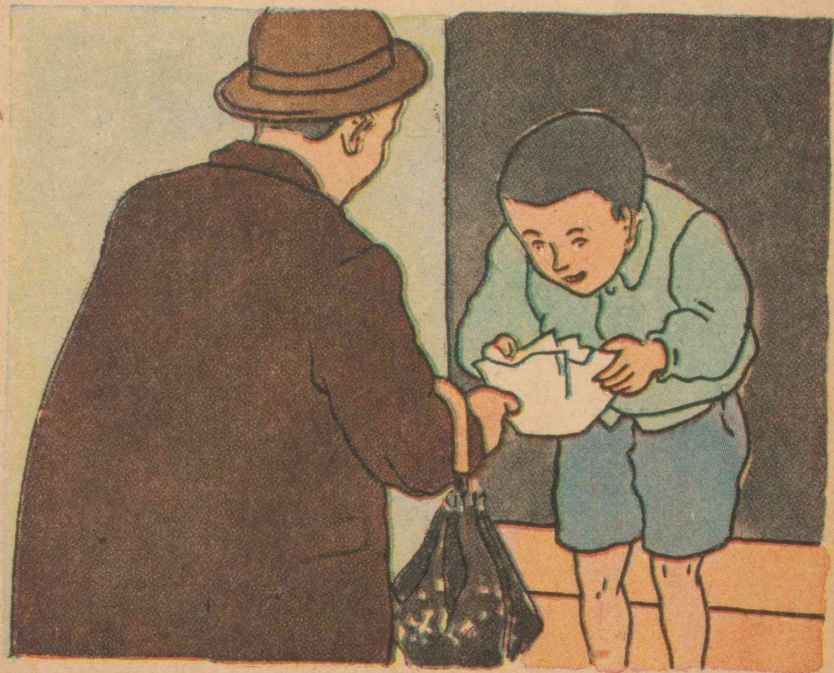
「ねえ、おかあさん、もう じきに あわが なくなる」

から、ぼく ひばりを にがして やろうと 思うの
ですけれど——」。

すると、そばで きいて いた おとうさんが、

「あきら、それは かえつて かわいそうだよ。この
ひばりは 生まれてから まだ 一ども 自分で え
さを さがした ことが ないのだよ。こんな ゆき
の 中へ はなされたら、きつと 虫も こくもつも
さがせないで こまつて しまふよ。どうか して
春まで かつて やりなさい。」
と いいました。

二三日 たつと、おと
うさんは ゆきの ふる
中を、町の 小どりやさ
んから 五ごうほどの
あわを 分けて もらっ
て 来ました。
あきらさんは 大へん
よろこんで おとうさん
に おれいを いいまし
た。



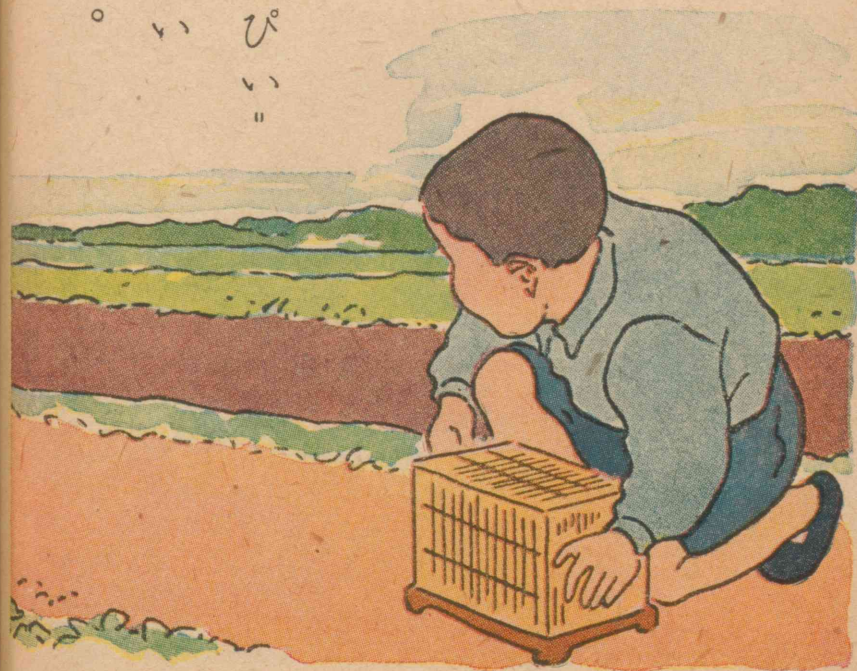
いつの まにか にわや はたけの ゆきが きえる
と、あたたかい 日を あびて よもぎや たんぽぽが
青い めを 出しはじめました。もう すぐ 春に な
るのです。

しかし、ひばりの あわは すっかり なくなつて
しまいました。

ある 日、あきらさんは ひばりの かごを さげて
うらの はたけへ 行きました。そして ひばりを か
ごから 出して やりました。ひばりは しばらく あ

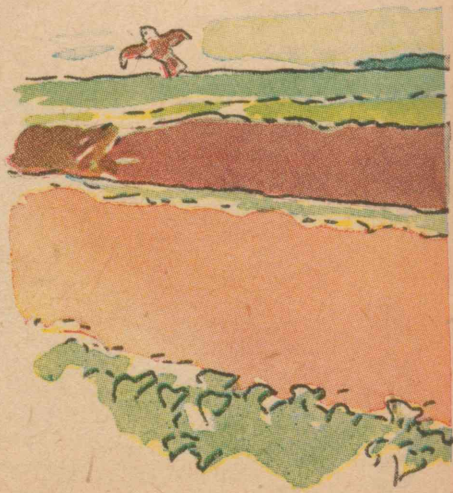
きらさんの まわりで
ぴよんぴよんと あそん
で いましたが、やがて
高い 空を 見あげたか
と 思うと、きゆうに
まっすぐに まいあがつ
て 行きました。

もう どこにも あの ぴい
ぴいと いう かわいらしい
声は きこえませんでした。



それから いく日か たちま
した。

あきらさんが のはらを あ
るいて いると、一わの ひば
りが みちばたの くさむらか



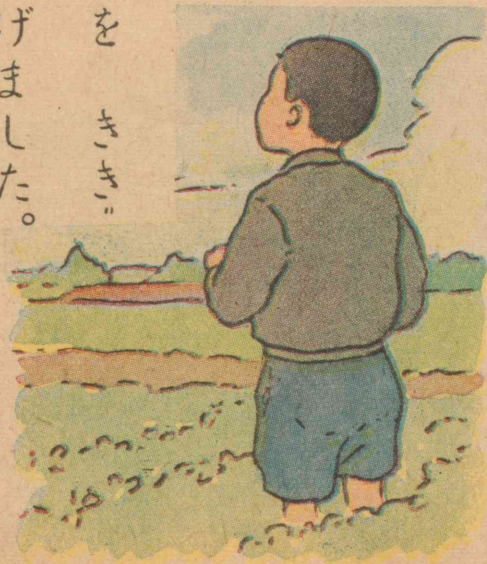
ら 出て 来ました。とても おなが
ように ぴいぴいと 口を あけながら あきらさんの
足もとへ やって 来ました。あきらさんは かなしく
なって、はっと 目を さましました。それは ゆめで
した。



ばりらしい 元気な 声が きこえて
くるように 思われました。ひばりは
もう 自分で えさを さがす こと
が できる ように なったのでしよう。
ひろびろ した あかるい 空で
たくさんの ひばりが たのしそうに
うたって います。
あきらさんは、ひばりを はなして
やって ほんとうに よかったと 思
いました。

あさ おきると、あきらさんは いそいで うらの
はたけへ 出て、みました。あかるい 空の あちらか
らも こちらからも、「ピイチクピイチク」と なく たの
しそうな ひばりの うたが
きこえて ききました。

あきらさんは その たく
さんの うたの 中から は
なして やった ひばりの 声を きき
分けようと して、空を 見あげました。



すると、とおい 空の 方から ほんとうに あの ひ

ン	ん	ワ	わ	ラ	ら	ヤ	や	マ	ま	ハ
		(ヰ)	(ゐ)	リ	り	イ	い	ミ	み	ヒ
		ウ	う	ル	る	ユ	ゆ	ム	む	フ
		(エ)	(ゑ)	レ	れ	エ	え	メ	め	ヘ
		ヲ	を	ロ	ろ	ヨ	よ	モ	も	ホ

は	ナ	な	タ	た	サ	さ	カ	か	ア	あ
ひ	ニ	に	チ	ち	シ	し	キ	き	イ	い
ふ	ヌ	ぬ	ツ	つ	ス	す	ク	く	ウ	う
へ	ネ	ね	テ	て	セ	せ	ケ	け	エ	え
ほ	ノ	の	ト	と	ソ	そ	コ	こ	オ	お

パ	ぱ	バ	ば	ダ
ピ	ぴ	ビ	び	ヂ
プ	ぷ	ブ	ぶ	ヅ
ペ	ぺ	ベ	べ	デ
ポ	ぽ	ボ	ぼ	ド

だ	ザ	ざ	ガ	が
ぢ	ジ	じ	ギ	ぎ
づ	ズ	ず	グ	ぐ
で	ゼ	ぜ	ゲ	げ
ど	ゾ	ぞ	ゴ	ご

ピ	び	ヂ	ジ	ギ	リ
ピ	び	ヂ	ジ	ギ	リ
ユ	ゆ	ユ	ユ	ユ	ユ
ピ	び	ヂ	ジ	ギ	リ
ヨ	よ	ヨ	よ	ヨ	よ

ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ
ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
ヨ	よ	ヨ	よ	ヨ	よ

べんきょうの手びき

さかなどり

(一)

1 三人は どのの 上で キラキ
ラ 光る 小川を みて いま
す。手に 何を もって いる
でしようか。ちようめんにか
いて みましよう。

2 三人は どんな ところで さ
かなを とる つもりでしよ
か。はなしあいましよ。

3 かきかたの けいこを しまし
よう。

大きな 声。
キラキラ。

元気 よく。

(二)

1 三人は どこで 何を とった
でしようか。本を みて よい
こたえに ○の しるしをつ
けましよう。

川の 石の ところで めだ
かを すくいあげました。
きしの くさむらの ところ
で めだかを すくいあげま
した。

ながれの 中で ふなを す
くいあげました。
小川の 中で さかなをつ

りあげました。

2 つぎの ぶんの 「かげは どん
な ことでしよか。みんな
はなしあつて みましよう。

きしの くさむらが 水の
上に かげを うつして い
ます。

石の かげに めだかが た
くさん あつまつて いまし
た。

3 かきかたの けいこを しまし
よう。

サラサラ。
たいようの 光。

二 どんしゃと きしゃ
(一) どんしゃ

1 しゃどうと ほうは どのよ
うに ちがうでしよか。本で
しらべて みましよう。

2 しんごうどうの 色は どう
かわりますか。どの 色の 時、
みちを よこぎつたら よいの
でしよか。はなしあつて み
ましよう。

3 つぎの ぶんで 本と ちがつ
て いる ものに Xの しる
しを つけましよう。

ほうどうを じてんしゃが 走
つて います。

しゃどうには どんしゃや
バスが 走つて います。
しんごうどうの 色が 赤の

時に みちを よこぎりまし
た。

つぎに 来た でんしゃは

こんで いました。

おばあさんに ぎせきを ゆ

ずりました。

4 かきかたの けいこ。

だいたい色。

赤の 時。

(二) きしやに のつて

1 はるおさんは 汽車の まどか

ら いろいろなものを見ま

した。何を 見たてしうか。

つぎに かいた ものの 中か

ら 見た ものに ○の する

しを つけて みましう。

三

(一)

1 あつ子さんは なぜ らくがき
を けたのでしうか。はな

きれいに しましう

3 かきかたの けいこ。

ブラットホーム。

汽車。

ろ。どんどん。
ひとびと。どやどや。ひろび

うみ。ふね。こうば。山。ト
ンネル。うし。ぎつしや。し
んぶんを うる 人。

2 つぎの ことばのように 二と

くりかえした ことばを ちよ

うめんに きれいに 書いて

みましう。

ひとびと。どやどや。ひろび

して みましう。

2 書きかたの けいこ。

はくぼくて 書いて ありまし
た。

(二)

1 よごれた ものは なぜ せん

たくを するのてしうか。

2 つぎの ぶんを よんで、よし

子さんは どんな じゆんじよ

で せんたくを したか。()の

中に ばんごうを 書きなさい。

() 小さな たらいに 水を 入

れました。

() ポンプで 水を くみました。

() よごれた 所に せっけんを

つけました。

(三)

1 ふろを わかしたのは だれで

しうか。ちよめんに 書い

て みましう。

2 つぎの ことば だれが ipp

た ことばですか。本を よん

で しらべましう。

「もう わきましたよ。あさお

は おじいさんと さきに

おはいりなさい。」

「ふろが わきました。」

あさおは 何を して あそ
んで いたのかな。こんな
所に だろが ついて いる
ぞ。

「おじいさん、いたいですか。」

3 書きかたの けいこ。
パチパチと はぜる 音。

四 ことばあつめ

(一) なかよしの ことば

つぎの ことばを よんで な
かよしの ことばを ——で
つなぎましょう。

あつい つばめ
はやい なつ
高い かぜ
すずしい そら

2 つぎの ことばの なかよしの
ことばを かんがえましょう。

おもい ——
ひろい ——
ながい ——
きれい ——
くらい ——

3 書きかたの けいこ。
海。

ボール。

(二) はんたいの ことば

つぎの ことばの うちで は
んたいの ことばを ——で
つなぎましょう。

うつくしげ おそい
はやい すくない

うすい またない
おおい あつい

2 書きかたの けいこ。

深い。浅い。近い。

五 しょうぼう

(一) かじ

1 つぎの ぶんを くらべて み
ましょう。

びつくりして とびおきまし
た。
びつくりして おきました。
ぼくたちは いそいで おも
てへ 出ました。
ぼくは いそいで おもてへ
出ました。

2 つぎの ぶんを ちょうめんに

きれいに 書いて みましょう。

道の むこうの家が まっ
かです。

近所の ひとびとが 走って
行きます。

3 かじは どう して おこるの
でしようか。いろいろ 話し合
って みましょう。

4 書きかたの けいこ。

道の むこうの家。

(二)

1 本を よんで つぎの ぶん
()の 中に ばんごうを つけ
ましょう。
() しょうちゃんが ふえを
ふく。

() じどうしゃが 走り出す。
() ホースが つぎつぎに まるく
く ふくらむ。

() エンジンが うごき出す。
() いきおい よく 水が とび
出す。

2 しよちよさんの 話に つい
て、みんなて 話し合つて み
ましよう。

3 書きかたの けいこ。
ブルブル、エンジンが うご
いて います。

六 はしらどけい
1 この ぶんは どけいの ふり
こや はりが、夜なかに 話を
して いる ようすを 書いた

ものです。みんなて それぞれ
げきに して やつて みまし
よう。

いく人で したら できるでし
ようか。

どんな したくを したら よ
いでしようか。
話しかたを いる いる くふう
して みましよう。

2 あなたは どけいを見て 時
こくが わかりますか。学校の
どけいは いま 何時何分でし
ようか。

3 書きかたの けいこ。
夜の 十時。
カッチン、カッチン。

長いはり。

(一) ゆきが ふる

この うたを 何べんも よん
で、本を 見ないでも 見える
ように しましよう。

(二) ゆきの あさ

ゆきが ふつたら みなさんは
どんな ことを しますか。み
なさんも ゆきの 日の こと
を 話し合つて みましよう。

2 書きかたの けいこ。
池の 所が すこし 黒ずんで
いるだけです。

(三) 1 ゆきあそび
はるおさんたちは どんな ゆ

きあそびを しましたか。あそ
んだ じゆんに ちようめんに
書いて みましよう。

2 ゆきだるまの かおには どん
な ものを つけますか。
ゆきうさぎの かおには どん
な ものを つけますか。

ハ ゆうびん
(一) 1 小づつみ

はるおさんが 書いた 手がみ
を ちようめんに 書いて み
ましよう。

2 はがきや えはがきや 手がみ
を あつめて 書き方を しら
べましよう。

3 書き方の けいこ。

(二)

おもしろそうな 話ばかりです。
ライオンと ねずみ。
ポストから 手がみの どどく
まで。

1 六まいの えを 大きく 書い
て かみしばいに して やつ
て みましよう。

2 ゆうびんきよくへ 行って い
ろいろ しらべて みましよう。

九 どうわ

(一) 町の ひ

1 坂の 上で はるおさんたちは
何を 見たでしようか。その
時の ようすを 話して みま
しよう。

2 はるおさんたちが 車の 後を

3

おして あげなかったら・おじ
さんは どう なったでしよう
か。みんなて 話し合っ
て みましよう。

3 書き方の けいこ。
家の 前から 坂に なって
います。

車の 後へ 走って 行きました
た。

(二)

1 春の 空へ
あきらさんは いつ どこで
ひばりの 子を ひろいました
か。

2 その 時、ひばりの 子は ど
んな ようすを して いまし
たか。

3 あきらさんは すりえを どん
なに して 作りましたか。

4 冬に なって どんな こまつ
た ことが おこって きまし
たか。

5 それで あきらさんが どんな
ことを おかあさんに いいま
したか。

6 あきらさんは おとうさんに
なぜ おれいを いったのです
か。

7 あきらさんは ひばりの ゆめ
を見た よくじつ、はたけへ
出て どう しましたか。

8 書き方の けいこ。
竹の へら。

秋の はじめごろ。
冬が 来て のはらに さむい
北風が ふきはじめました。

あたらしく 出た おもな ことば

○あせ

あそこ

あたる

あまい

あやまる

あわ (あま^ま白^むむ)

あわ (あ^たべ^わる)

あんぜんちたい

○いきなり

いさましい

いそがしそうに

いたずら

いとこ

いなか

○うえき

うて

うる

○えり

エンジン

えんとつ

○おいわい

お気のどく

おこす

おしつける

おす

おひやくしゅう

おもい

おもいだす

○かいつ

おれい

おゆ

○かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かいつ

かばん

かまう

かまど

がまんする

かりいれ

かりる

かるい

川ぞこ

かんじん

○きえる

きつて

きつぶ

きめる

きやく

きゆうに

きりかぶ

○くぐる

くさむら

くじゃく

くだ

くむ

○けす

けむり

○こうば

こおり

こくもつ

こする

こづつみ

米

○さいご

サイレン

さえずる

さお

さがす

さかだてる

さげる

させき

さど

さとう

○しかし

しずか

下ぎ

したく

しゃしゅう

しゃどう

しゅうぼう

しゅうぼうし

しゅうぼうし

(28)

(16)

(40)

(59)

(27)

(13)

(46)

(10)

(61)

(35)

(83)

(22)

(8)

(20)

(27)

(27)

(33)

(9)

(98)

(52)

(35)

(54)

(25)

(25)

(45)

(103)

(43)

(78)

(30)

(39)

(50)

(99)

(40)

(7)

(98)

(20)

(19)

(67)

(45)

(54)

(55)

(36)

(51)

(19)

(15)

(48)

(50)

(50)

(28)

(16)

(40)

(59)

(27)

(13)

(46)

(10)

(61)

(35)

(83)

(22)

(8)

(20)

(27)

(27)

(33)

(9)

(98)

(52)

(35)

(54)

(25)

(25)

(45)

(103)

(43)

(78)

(30)

(39)

(50)

(99)

(89)

(7)

(40)

(45)

(36)

(37)

(98)

(17)

(48)

(51)

(29)

(34)

(33)

(29)

(33)

(22)

(49)

(36)

(92)

(23)

(14)

(83)

(26)

(9)

(48)

(4)

(4)

(107)

(56)

(19)

(56)

(19)

○トラック (15)
 ○なおす (60)
 長ぐつ (70)
 ながれ (6)
 なまけもの (59)
 ならう (61)
 なんてん (77)
 ○にあう (44)
 にかす (103)
 に車 (87)
 ○ねがう (19)
 ねじ (60)
 ○のこる (27)
 のみもの (29)
 のんき (58)
 ○はいたつ (86)

(86) (58) (29) (27) (60) (19) (87) (103) (44) (77) (61) (59) (6) (70) (60) (15)

はいりこむ (15)
 はがき (60)
 はく (70)
 はくぼく (6)
 はきみ (59)
 はしらどけい (61)
 はせる (77)
 はっしゃ (44)
 はねる (103)
 はり (87)
 パケツ (19)
 ○ひくい (60)
 ひげ (27)
 ひたい (29)
 左 (58)
 ひつばる (86)

(48) (22) (89) (34) (46) (4) (55) (12) (19) (40) (55) (24) (34) (25) (78) (70)

ひばり (70)
 ひびく (78)
 ひも (25)
 ひやつかてん (34)
 びよう (24)
 びんせん (55)
 ○ふうとう (40)
 ふくらむ (19)
 ふくろ (12)
 ふどい (55)
 ふみだい (4)
 ふりこ (46)
 ふろしきづつみ (34)
 ふりかえる (89)
 ぶつかる (22)
 ブラットホーム (48)

(24) (9) (73) (20) (55) (65) (47) (85) (52) (81) (81) (58) (14) (80) (100) (95)

しょちよう (50)
 しんごうとう (16)
 しんせつ (50)
 しんぶん (29)
 ○すいこむ (52)
 すがた (27)
 すきとおる (10)
 すく (19)
 すくいあみ (4)
 すくう (12)
 すごい (53)
 すばやい (51)
 すみ (75)
 すりえ (97)
 すりばち (97)
 ○せき (20)

(20) (97) (97) (75) (51) (53) (12) (4) (19) (10) (27) (52) (29) (50) (16) (50)

せつかく (50)
 せつけん (16)
 せわ (50)
 せんたく (29)
 ○そうだん (52)
 ぞうきん (27)
 ○たいら (10)
 大せつ (19)
 たきぎ (4)
 竹 (12)
 竹ぼうき (53)
 たしかめる (51)
 たどん (75)
 たのむ (97)
 たれる (97)
 たんぽぽ (20)

(105) (76) (64) (76) (22) (73) (97) (40) (97) (92) (35) (65) (36) (41) (37) (60)

だいじようぶ (60)
 だいたい色 (37)
 だまる (41)
 だめ (36)
 ○ちこく (65)
 ○つつむ (35)
 つつみがみ (92)
 つまらな (97)
 つみこむ (40)
 つもる (97)
 つらい (73)
 ○ていりゆうじよ (22)
 手おしぐるま (76)
 てつきよう (76)
 手ぬぐい (64)
 でんとう (76)

(45) (43) (26) (29) (17) (59) (67) (85) (61) (80) (80) (57) (57) (78) (16) (50)

後 (90)	両 (62)	近 (47)	米 (30)	時 (16)	高 (5)
少 (90)	年 (63)	早 (48)	西 (31)	左 (22)	声 (5)
作 (97)	黒 (71)	道 (49)	書 (34)	分 (23)	光 (6)
秋 (99)	竹 (73)	話 (50)	思 (34)	汽 (24)	元 (8)
冬 (100)	暗 (81)	長 (52)	答 (38)	車 (24)	気 (8)
北 (100)	取 (84)	池 (52)	海 (44)	外 (25)	所 (14)
風 (100)	前 (87)	夜 (55)	深 (47)	牛 (26)	見 (16)
自 (109)	坂 (88)	昼 (56)	浅 (47)	間 (28)	色 (16)

まんいん	まど	まく	まき	○まいあがる	ポンプ	ポスト	ほどう	ほそい	ほす	ほしがる	ホース	○ほおかむり	ページ	へら	○へい
(18)	(25)	(60)	(87)	(106)	(38)	(83)	(15)	(14)	(40)	(98)	(52)	(73)	(82)	(97)	(34)
ゆずる	ゆすぐ	ゆきつり	ゆきだるま	ゆきかき	○タヤけ	○やさしい	もれる	もむ	もがく	○もえる	めくる	○めいめい	むぎわらぼうし	○むこうぎし	○見つかる
(20)	(39)	(75)	(74)	(70)	(92)	(45)	(67)	(37)	(97)	(40)	(80)	(7)	(77)	(13)	(54)
わく	○わかす	れんしゅう	○るすばん	両方	○りょうがわ	らくがき	○ライオン	よもぎ	夜ふけ	よこぎる	よごれる	○ようじん	ゆるめる	ゆめ	ゆびさす
(40)	(40)	(52)	(23)	(62)	(11)	(34)	(82)	(105)	(67)	(17)	(37)	(54)	(91)	(107)	(7)

編集にたずさわった人

監修者 学士院会員 柳田国男

編集委員 東京高等師範学校 教授 岩井良雄

国立国語研究所員 岩淵悦太郎

民俗学研究所理事 大藤時彦

東京杉並第四小学校校長 上飯坂好実

東京都立西高校教諭 鳥山榛名

東京書籍株式会社編集部

挿絵及び装釘 大沢昌助

あたらしいこくご 一二ねん下 (小学 第一学年後期用) 小国二〇八

昭和二十五年三月二十五日 印刷
昭和二十五年七月十日 発行 定価 参拾六円五拾銭
(昭和二十四年十月十日 文部省検定済)

著作者 東京書籍株式会社編集部
代表者 藤田貞次

発行者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 長得一

印刷者 東京都台東区二長町一番地
凸版印刷株式会社
代表者 山田三郎太

Approved by Ministry of Education
(Date Jan. 10, 1950)

発行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

(出版権の設定登録及び表紙の意匠、装釘登録中)



広島大学図書

広島大学図書

0130449880



東京書籍株式会社

文庫

49

880